
彼と彼女の恋愛事情

伊東歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼と彼女の恋愛事情

【著者名】

伊東歩

Z8776

【あらすじ】

恋愛。それは奥が深く、それでいて広範囲に渡るもの。100人いれば100通りの愛情があるものです。この物語は、たまたまな視点で見る恋をテーマにしたオムニバスです。

手紙（前書き）

互いに想い合つ男女。相手に対する想いや日々の近況を手紙にし
たためます。互いを支え合つたり、時には喧嘩をしたり。そんな二
人にはある秘密がありました。

手紙

僕から君へ 1

お元気ですか？ 突然の手紙つてやつぱり緊張するね。でも君と話をする方法はもうこれしかないんだし、仕方ないね。

君に会いたいという気持ちは今もまったく変わっていません。君はどうかな？ 僕と同じ気持ちでいてくれているのかな？

君のことを初めて知つてからどのくらい経つかな？ いきなりこんなこと言うのも何だけど、最初は今ほど君を好きだとか思わなかつた。言い方悪いかな？ つまり一日惚れではなかつたつてこと。もちろん今は違うよ。いつも会いたいと思つ、写真を眺めたりだつてしてる。旅行の写真とかや。

そうだ、最近の状況でも報告しようかな。僕は相変わらずあの「ンビ」でバイトの日々。特に変わったこともないんだ。近況報告つて言つておきながら話すことなしなんてつまらないよね、ごめん（笑）あ、そうそう。前に話した竹中さんって人。無事仲直り出来たよ。最近は昔よりよくしゃべつたりしてる。君のことでもそのひが話そつかな？ でも紹介できないしね。もう少し考えるよ。

えつと。なんか改まって手紙とか書いてみたのはいいけどいや書こうとすると思いつかないもんだね。男つてあんまり手紙とか書かないからさ（言い訳かな？）これから続けていつたらそのうち少しは読めるようになると思うんだ。それまで根気強く待つて、ごめんね。じゃあまたね。

私から貴方へ 1

突然のお手紙すごく驚きました。でも嬉しかったです。終わりの方の言葉から察するにこれからもお手紙をくれるつてことでしょ？ じゃあ私も書かなきやね。なんか文通みたいで楽しいね。小学校以来かしら？ 友達とよくやつてたつけ、交換日記とか。あ、でも私も

文章とか書くのが苦手だからあんまり面白い手紙とか期待しないでね。私はしちゃうけど、なんて（笑）

私もちょっと近況報告でもしようかしら。私はようやく大学になじみはじめたところ。やっぱり慣れない土地だし不安とかあったけど。でも慣れない土地での新生活って言つたらあなたも一緒にね。こっちに来てもうすぐ半年になるのか。早いような遅いような。時々寂しくなるんだけど私もあなたのことを思い出しながら毎日頑張ります。

あ、そういうえば！旅行の写真見てるとか書いてなかつたつけ？やめてよー、見ないでつてあれほど言つてたじゃない（怒）自分でも恥ずかしくて見れないんだから。あなたに見られたらもつと恥ずかしい。もういつそ捨てちゃつてよ。それが嫌ならもう見ないで。約束よ。指きりげんまん。これ読みながらちゃんとやつてね。はい、指きりげんまんうそ
ついたら針千本飲 ます 指切
つた！もう見ちゃだめよ、約束したんだからね。

ところで、竹中さんってたしか私も一度見たことがあるよね？写真で見たことあつたから覚えてる。なかなか記憶力いいでしょ、えへへ。よろしく伝えといて、私のこと知らないだろうけど（笑）さてさて、最初だしこのくらいにしどこつかしら。じゃあまたね、次の手紙楽しみに待つてます。

僕から君へ 2

まずははじめに、あの写真見てごめんなさい。僕も後から気付いたよ、そういうえば見るなつて言つてたなーみたいな（苦笑）でもかわいいんだしいいやない。とは言え一方的に約束させられたしなあ、もう見れないかあ。残念つー（古いね）

そういえば昨日・・じゃなくて一昨日か。一昨日の昼に真っ赤なソファが届いたんだけど、心当たりある？もう料金はいただいてますつて言つてたからとりあえず受け取つといったんだけど。僕は頼んでないけど君らしい趣味だし多分そうだと思つて。この部屋には

奇抜な感じもするけどすぐに馴染むと思う。でも結構高かつたんじやない? 大丈夫だったの? まあ一言田にお金の話なんてちょっとあれだけどさ。座り心地もいいし結構な大きさだし気になつて。

まあそんなことはいいか。実はね、一昨日のバイトの時に店長に言われたんだよね。一日置きじゃなくてなるべく毎日出るようにしてくれないかって。まあ学校もあるだらうから無理は言わないけど。でもさすがに無理だよねえ。僕はだいぶ仕事にも慣れてきたけど、だからって出来ないでしょ。説明しようともどう言えばいいのか分からぬから適当にこじまかしといったよ。

今ふと鏡を見ながらにやけている自分に気付いてしまった、重症だね。いつか近いうちにちゃんと君に会いたいなあ。会つたら何をしようか? 僕は定番だけど遊園地とか動物園とか行きたいかな。もちろん手を繋いでね。昼はイタリアンとかいいな。そして夜は高级なホテルのレストランでディナーを。完全に夢物語モードになってしまった(照笑) でもその時のためにちょっとずつだけど貯金をしてるんだ。いろいろと節約したりしてね。そのせいかついこの赤いソファの値段が気になってしまって、つてもうその話はいいか(笑)

まあいつになるか分からないけど、その時のためにこれからも頑張つて働くこつと思います。ではでは、明日も早いみたいなのでそろそろ寝ます。それじゃあまたね。

私から貴方へ 2

そのソファ気に入ってくれた? 大学のお友達とウインドウショッピングに行つたときに偶然立ち寄った家具屋さんで見つけて一目惚れしちゃつた。きっとこの部屋に合つなかつたの。ばっかりでしょ? 私つて意外とセンスいいのよ。大きいからゆつたり出来るでしょ。それでバイトの疲れをとつて。

明後日は日曜日だよね、友達と遊ぶ約束しちゃつた。あなたはバイトバイトで大変なのにごめんね、何をしたかちゃんと報告する

から。お土産も買つし楽しみにしてて。甘いもの苦手だったよね。
ちゃんと考えて買つてくるね。

なんか私も会いたくなつたなあ、あんまり考えないよつこして
たのに。あなたが会つたときは「うじょうあしじょうつて言つから
だよ。でもそういうの考えるのつてすごいわくわくするよね。遊園
地もいいけど私はどこか旅行に行きたいな。お風呂好きだからやつ
ぱり冬の温泉街とか憧れる。混浴とか入つちゃう！？」

でもまずはあなたに会えることが何よりの贅沢かな。お互にこ
んなだしそうそう会えるとは思わないけど・・でもいつかは必ず一
緒に旅行したり遊園地に行こうね！また描きりげんまんしつく？（
笑）

そろそろテストが近いなあ。もしかしたらこうやつて手紙を書
く時間もなくなつちやうかも。なんたつてみんなの倍頑張らなきや
だし。でもなるべく書くよつてするからね。短くても、たとえ一言
だけでも書くから。

僕から君へ 3

そつか、もうテストの時期か。大変だよね、僕頭悪いから大学
の勉強なんてとてもついていけないし。何か少しでも役に立てたら
いいのにね、夜食を作つてあげるとか。でも無理か。君が食べる頃
には完全に冷めちゃつてるだろうし（まあ当然だけどさ）あ、でも
冷凍できるようなものだつたらいいんじゃない？チンすればすぐに
食べられるようにならね。まあ知つてのとおり料理なんてまともに作つ
たことないしおいしく作れる自信はないけど。とりあえずお腹を満
たすことは出来るんじゃないかな。よし、君がテストで頑張つて
間僕は少しでも料理の腕が上達するよう頑張ろつ。いつか会つたと
きは僕の手料理を振舞うよ。またひとつ会つたときにしたいことが
増えた。嬉しいような会えない辛さが増えて悲しいよつな。あ、そ
んなこと言つちゃいけないね。君だつて僕と同じよつて会つたとい
思つてくれてるんだから、その気持ちをむやみに膨らますよつな發

言は控えないと。テスト勉強に差し支えてしまうね。

手紙のことは気にしなくてもいいよ。勉強で忙しいときは無理に書いてくれなくても大丈夫だよ。そりやあ寂しくないって言ったら嘘になるけどさ、大変な時期に君に無理をさせるくらいならソッチの方が全然いいよ。今の僕には料理上手になるという新たな目標も出来たしね。それにテスト期間が終わればまたたくさん書いてくれるでしょ。それを今か今かと待ってるのも悪くないんじゃないかな。別に強がりを言つてるんじゃないよ、大丈夫。少しでも君の力になれれば嬉しい。テスト頑張つてね。応援してるよ。

私から貴方へ 3

ありがとうございます。私のために料理の勉強を始めるだなんて、私はなんて幸せ者かしら。あなたの手料理楽しみにしておくね。

早い人は今日くらいから本格的にテスト勉強を始めてるみたい。私も負けてられないや。少しでも多く勉強しないとついていけない。そういうえば今日お母さんから荷物が届いたんだ。なんか缶詰とかカツップ麺とか食料が結構入つてた。テスト期間だから料理しないだろうなとか思われたのかしら?まあそのとおりだけさ(笑)あとお礼の電話をしないと。とりあえずその荷物はおいおい片付けることにするね。そんなに大量に届いたわけじゃないけど勉強しながらや。早速カツップ麺をひとつ頂くことにします。太るから気をつけないと。

今日はこのくらいで。短くてごめん、テストが終わつたらいろいろと書くね。あ、友達と遊んだこともちゃんと書くからね。それじゃあまた。

僕から君へ 4

やっぱり大変なんだなあ大学生つて。まあある意味僕もそんなんだけど・・でも君は本当によく頑張つてる。勉強勉強つてなつてるときにこんな間の抜けたコメントごめんね。でも本当に思つんだ、

君は頑張ってるつて。みんなの2倍頑張らなきやいけない状況でよくついていけてるもんだよ。僕が少しでも君の支えになつてあげなきやね。今日早速料理の本を買つてきた。料理器具は君が使つていった分が揃つているみたいだからあとは僕の腕にかかるつてわけだ。つて自分でプレッシャーかけちゃつた（汗）もし食べて不味かつたらお母さんから送つてもらつたカップ麺を食べて。いやいや、そんな弱氣でどうする、僕。君がこんなに頑張てるんだから僕も負けてられないよね。料理もバイトも人一倍頑張らなきや。

ふと思つたんだけど君がテスト勉強しているのに僕が長々と手紙を書いたら邪魔かな？読むのに時間を割いちやうだらうし、君の時間が減っちゃうよね。テスト中は僕も短めにするよ。その方が君のためになるだろうし、なによりテスト後が一層楽しみになるもんね。それじゃあ今日はこの辺で。勉強頑張つてね。

私から貴方へ 4

ご馳走様でした。ちょうど今あなたが作つてくれた夜食を食べ終えたところ。すごいじゃん、美味しかつたよ。きっと出来たてはもつと美味しかつたんだろうなあ。早く会つて手料理をご馳走してもらいたい。まあ私も料理上手にならないといけないんだけど。つていづか私の方が上手くないとよね、本当は。

さてさて、いつまでも料理の余韻に浸つてる場合じゃないね。いよいよ明後日からテスト。今日は仕上げのつもりで頑張らなきや。あ、そうだ。ありがとね、夜食だけじゃなくて手紙のこと、気を遣つてくれて。私もあなたの期待に応えられるように努力します。4日ぐらいで終わるから、それまでちょっと待つてね。

私から貴方へ 5

終わったよー！ついにテスト終わりましたー。長い戦いがようやく幕を下ろしました。あ、なんかテンション高い。やっぱり勉強

から開放された喜びとよつやくあなたに手紙が書ける嬉しさからか
しら。あ～なんかすごく落ち着かない。久々の手紙のような感じで
緊張しちゃう。何か話したい。でも何話そつか？テストのこと言つ
たつてしようがないしな。あ、そうだ、日曜日のこと話すって言つ
てたんだよね。何したつけな？悠ちゃんと愛結美ちゃんと遊んだん
だけど、映画見てお昼食べて、って別にこれと言つて盛り上がる
話でもないなあ、あはは。

・・ちょっと落ち着きました。まだお礼言つてなかつたよね。
夜食とか手紙のこととかありがとうね。本当に助かりました。なん
か不思議だなあ、なんでもない普通の言葉のはずなのにすごい支え
られた気分。まあテスト中は勉強ばっかりで返せなかつたけどあな
たの手紙のお陰で頑張りました。ありがとう。これから友達と少し
出かけてきます。夜にまた書くね。

ただいま。今は7時10分前。ちょっとといつもより遅いかな？
テスト終わつたからつて盛り上がつちゃつたみたい（笑）でも少し
くらいいいでしょ。私だつて頑張つたんだから。でもほんと嬉しい。
これからまたいっぱい手紙を書けるね。よろしくお願ひします（ち
ょつと改まつてみました）

僕から君へ 5

テストお疲れさま。よく頑張つたね、それは認める。認めるけ
ど、羽目を外し過ぎなんじゃないかな？髪切つたんだ？・・まあそ
れはいいよ。でもさ、染めたでしょ。茶色っぽくなつてるもんね。
間違いなく地毛ではないよね。前にも言つたよね？一人で勝手に決
めるのは止めてくれつて。ソファだつてそうだ。僕に何の断りもな
く買つてきた。これが君だけのものだつたらいいよ、普通の人と同
じようにさ。でもそうじゃないだろ。僕は何かをするときにはちゃ
んと君に言つてゐつもりだ。もう一度よく考えててくれ。僕たちは僕
と君であつてそうでないんだ。

「めんなさい、調子に乗ってしまった。似合ひと思つたの。あなただけ黒髪よりは染めた方がかっこいいし・・違うよね、そんなことが言いたいんじゃないよ。分かつて。あなたに無断でやつたことが悪いんだよね。

悪気があつたんじゃないの。これだけは信じて。なんて言つか、驚かせたかった。あなたに内緒でソファを買つたり髪を染めたりして驚いてほしかつたの。でも怒らせちゃつたね。「めんなさい。もうやめるね。

私のこと嫌いになつた?なつたよね、こんな自分勝手な人間なんて嫌いになつて当然だよね。もう止めようか、手紙。あなたも私もみたいなのより可愛くて優しい彼女を見つけて。本当にごめんなさよになら。

僕から君へ 6

馬鹿なこと言つなよ。あれくらいで嫌いになるわけないじやないか。そりやあちよつとはむつときてしまつたけど、今でもまったく変わらず君のことが好きだ。むしろそりやつてしまらしくなられると余計に愛おしくなつてしまつたよ。僕たちは一心同体だ。どんなことも一人で乗り越えられる。前にも話しただろ。僕はずつとずっと君を好きでい続ける。たまには喧嘩もするかもしね、怒つて愛想を尽かしそうになるかもしね。だけど結局僕たちは元に戻ると信じてる。そつだらう?君だつて分かつてははずだよ、僕たちはずつとずつと一緒になんだ。離れることなんてできない。

——昨日は少し言い過ぎた。僕も謝るよ、ごめんね。でもこれからはちゃんとお互によく話し合おうね。僕だつていつ君に迷惑をかけるか分からぬ。今回のテストみたいにね。君が少しでも時間がほしいときはなるべく早く交代してあげなきゃね。

さて、そろそろ寝ようかな。明日は「君の番」だ。明後日の朝君からの手紙を楽しみにしておくよ。それじゃ、おやすみ。

ありがとう。最近私よくお礼言つてるよね（笑）

今日あなたからの手紙を読みながら昔のことを思い出してた。初めてあなたを意識したとき。鏡の向こうの自分が、自分であつて自分でないと悟ったとき。私は恐怖すら感じた。自分ではないもう一人の自分が、この体には宿ってるんだって怖かった。あなたも同じ気持ちだったかもね、だから一目惚れじゃなかつたんじゃない？でも時間が経つに連れ私はあなたが愛おしく感じてきた。私と体を共有するもう一人の私。毎日鏡を見ながらあなたに話し掛けた。あなたも同じように私に話し掛けてくれていたの？

男のあなたと女の私。同じ人間でありながら別々の人生を歩む私たちは他人には分からぬ絆で結ばれてると思う。それは単に一人の人間だからということではなくて、共に愛し合う者同士だからでもなくて。理屈じゃないようで、すぐ理に適っているようで。難しく考えるとキリがない。とにかく、私は自分と同じ容姿のあなたが好きで、あなたは自分と同じ容姿の私が好きで。一生会うことはできないのに旅行行こうとか夢を見たりして。それでも幸せだからいいのかな？私にはよく分からない。自分好きでもないのに他のどんなナルシストよりも自分を愛しているという不思議な状況。

明日はあなたの番。明後日は私の番。交互にやつてくるあなたと私の人生。完全に交わっているのに決して交わらない二つの人生。それでも私は今日も鏡を見ながらその奥にいるあなたを見ている。決して会うことのできないあなたを愛している。

異生結婚（前書き）

同性結婚。その言葉が聞かれるようになつて久しい昨今。人々の認識はどのように変化していったでしょう。これは、その先を行く（かもしれない）前衛的な発想の持ち主が主人公の物語です。

世の中には同性結婚なるものが広がりつつある。とは言えそれが一般的になるのはまだまだ先のことになるだろ。長年かけて積み上げられてきた人間の常識といつものはそう簡単に覆されはないのだ。ところで金田百合にはそれを批判する氣も差別的に見る氣もまったくない。むしろそれよりももつと（よく言えば）進んだ考え方をしていた。一般常識で言えばちょっとと考えにくいものだ。世間ではそれを非常識というだら。しかし百合にはなぜ今まで誰もこれを見しなかつたのかと不思議に思つほどだった

「まさに運命の出会いよ」

金田百合は職場の同僚と馴染みの喫茶店で「コーヒー」を飲んでいた。百合の声はいつになく興奮気味だ。といつても百合の性格からしてこうじう声を出すのはそつ珍しいことではないのだが。

「それはいいけどまあ、」

同僚の小森明子は百合のそれとは対照的に少なからず呆れた声だ。「あんたん家ペット禁止でしょ。どうすんのよ、それ

明子は百合の腕に抱かれる形でテーブルに置いてあるペット用のキャリー・バッグを指差した。

「指差さないでよ。それに、『それ』じゃなくてカシス」

「さつき買ったばかりでもう名前付けたんだ」

「かわいいでしょ。カシスソーダみたいな色だし」

百合は腕の中の子猫をうつとりと見つめた。

「あんた飲みに行つたらカシスソーダばっかだしね。つてそんなことはどうでもいいから、ペット禁止のアパートに住んでるあんたがどうやってその猫を飼うのかって話よ。」

明子の問に百合はそもそも当然のことのようこぼつてのけた。

「もひるん引つ越すわ

百合のあまりの短絡さにしばし啞然とする明子。

「あんたねえ・・先月やつと引っ越したばっかでしょ。あの苦労をもつ忘れたの？」

明子は1ヶ月半前のことと思い返した。

百合が大学進学と同時に上京し入居した安アパート。もうかれこれ10年近くになる。元来大学生のためのアパートであったので普通なら4年、長くとも6年ほどで皆このアパートから出て行くことになる。しかし百合は大学を卒業し、就職してもなおこの安アパートにとどまっていた。気付くと百合はこのアパート一番のお局と化していた。引っ越さなかつたことにこれといって理由などない。ただ強いて言えば面倒だったのだ。そんな百合が三十路を目前にしてようやく引っ越す決意を固めたのは他でもない明子の一言が原因だった。

「ここのボロい部屋に男は呼べないでしょ」

高校からの付き合いである明子は異性との交遊にオープンな性格だった。そこだけ見れば百合と明子はまったく正反対の性格と言えた。異性とあまり深い交流を求めたがらない百合の性格は10年近くもの間この古いアパートに住み続けることができた一つの要因とも言えるかもしれない。そんな百合が引越しを決意したのは明子の言葉通り男性を招いても支障のない部屋に住まなければと思つたからだ。それは明子のように軽い考え方ではない。もうすぐ30歳だ。そろそろ真剣に結婚のことを考えるべき時期だと思つたからなのだ。

部屋探しという行為はこれほどまでに体力を要するものだつたらうか。家賃、間取り、立地条件。考慮しないといけないものはたくさんある。どれかを妥協したり変なところでこだわつてみたり。百合の新居探しは予想以上の体力と時間を消費した。そしてようやく先月の上旬に今の住まいであるアパートに辿り着いたのだった。この日の前の友人はその今までの努力を一瞬の氣の迷いで全てふいにする気なのか。

「今すぐその子猫返してきなよ。今なら間に合ひやう」

「冗談でしょ？なんでそんなこと」

「それせこひちのセリフよ。偶然、なんとなく暇つぶしで立ち寄つただけのペッシュショップ。「かわいい」とか「かわいい」とか言つてひとしきり盛り上がつて手ぶらで出でてくるのが普通でしょ。なに買つちゃつてんのよ・しかもわざわざお金下ろしてきてまで」
「さうなのだ。百合は今までに籠の中で寝よつとしているこの子猫をペッシュショップで見つけた途端に血相を変えて外へと飛び出していった。何事かと明子が後を追つと百合は近くのATMで現金を引き出しているところだった。

「まさか・・」

明子に今まで言わせなかつた。百合は引き出した現金を手早く財布に入れると再び先ほどのペッシュショップへと引き返した。ため息を一つついて百合を追つ明子。店に入るところではある綺麗な赤毛の子猫が店員の腕から百合の腕へと渡されたところだつた。

「買ひます」

百合の声には今まで聞いたことがないくらいに強い意思が現れた。明子にはもはやそれを引き止めることができなかつた。

「という訳で、明日から早速新しい住処を探さないと」

百合の田はどこか遠くを見ていた。カシスとの新しい生活に思いを馳せてこるのであつた。

「一つ言つておくけど、このあたりはまだペッシュのところなんてほんと少なこのよ」

「分かつてゐる。多少は他の条件を削る覚悟よ。カシスのためにもなんとしてもいいところを見つけないとね」

百合は握りこぶしを作り力強く頷いた。なんとも勇ましい姿だ。

「もう何を言おうが通用しないわね」

明子は諦めた。15年の付き合いから百合の性格は分かつてゐるつもりだ。

「もちろん付き合つてくれるでしょ？アパート探し

「またあの苦労をするのかと思うとかなり気が引けるけどね。でもさ、あんた結婚のことを考えて男を呼べるような部屋に引っ越すつて目的だつたわよね？」

「うん。それが何か？」

「聞いたことない？ペットを飼うと婚期が遅れるって」

明子の言葉に百合はしばし黙った。ようやく口を覚ましてくれたか、明子は内心ほつとした。しかし、それも杞憂に終わる結果となつた。百合が口を開く。

「分かつた。じゃあ私カシスと結婚する」

十秒ほど友人の顔を見つめた後、明子はがっくりと肩を落とすのだった。

スタートが良からうが悪からうが新生活といつものほとんどの確立で気持ちのいいものだ。一ヶ月半前の新居探しでコツを掴んでいたのか、思いのほか早く新しいアパートを見つけることができた。それでも百合も明子もだいぶ体力を浪費したのだが。

「じゃあカシス、行つて来るね。いい子で留守番してよ」

日課である挨拶を行つて来ますのキスをして玄関を開ける。気持ちのいい朝だ。通勤するサラリーマンや登校途中の小学生たち。百合はスキップしたくなる気持ちをぐつと堪えてできる限りにやけないようになんと力を入れていた。カシスとの新生活が始まつてまだ2週間と経っていない。もちろんまだ新しいアパートに慣れず、それがまた百合の心を躍らせるのであった。

「おはよー」

職場に着くとすでに明子が出社していた。

「おはよ。朝っぱらから元気ね」

眠そうに目を擦っている。

「どうかした？」

「別に」

百合は室内を見渡した。百合は密かに明子が係長である田中健太

と恋仲にあると氣付いていた。田中は妻子持ちなので明子とは不倫の関係関係ということになる。田中はどうか知らないが明子は不倫や浮気に寛容だ、なので百合はそのことについて彼女を追及するようなことはしなかった。どうやら彼もすでに出勤しているようだ。忙しそうにパソコンとこちらめっこしている。ネクタイを見る。昨日と同じものだ。

「なるほど、眠たいわけだ」

「何か言った?」

「別に」

先ほどの明子の口調を真似て楽しそうに笑った。

「毎日毎日よくそんなにうきつきしてられるわね」

「まあね。私には裏切らない彼がいるからね」

「何それ?」

明子は不倫や浮氣を氣にする性格ではない。だから百合も何も言わない。しかし何も言わないからといって自分も氣にしないというわけではない。不倫、浮氣は裏切りだ、それが百合の考えだった。だから浮氣や不倫などするはずがないカシスは絶対な信頼のおける存在なわけだ。

「で、例の彼とはうまくいってるわけ?」

「もち、ラブラブよ」

嬉しそうににやける百合。その表情はまさに本当の彼氏の話をす るような顔つきだった。親友の嬉しそうな表情が嬉しくないはずはない。しかし世の中には例外というものもあるのだなと思った明子であった。

仕事中はいつもそわそわしていた。早く帰ってカシスに会いたい、考えることはそればかりだった。そのため仕事のミスが目立つようになってきた。上司には毎日のように小言を言われるようになつた。しかし百合はそんな環境さえ愛おしく思えてくる。会いたいという思いが募れば募るほど会えたときの感動が大きくなるものだ。腕時計を見る。よし、5時だ。今日も定時と同時に職場を飛び出した。

「カシスただいまー！」

勢いよく扉を開ける。毎度のことながら突然のことに驚くカシス
だつたが百合はそんな彼の様子にいまだ気付かない。カシスを見つ
けるなり飛び掛って抱きつく。

「寂しかつたでしょ、『ごめんねえ。いい子にしてた?』

いつも通りのやり取り。百合にとつては儀式に近い感覚になつて
いたかもしれない。毎日いつもやつてカシスを抱きしめることによつ
て自分たちの繋がりはもつともつと深くなつていくのだと自分自身
に言い聞かせるような感覚だつた。百合の腕の中で苦しそうにもが
くカシス。

「そんな暴れるほど喜ばなくてもいいよお」

ようやく百合の腕から開放されて逃げるよつに走り回るカシス。
その姿も見る者の目にははしゃいでいるように見えるのだろう。百
合は微笑ましい表情でそれを眺めるのだつた。

一緒に暮らし始めてどれくらい経つだらう。カシスの体は百合
が飼い始めたころに比べて1・5倍ほどに成長していた。もう赤ち
ゃん猫ではない。そうなるといろんなことに興味を示し始めるのは
当然のことだ。もちろんカシスも例外ではない。雑誌をびりびりに
破つたりコードの類を齧るのはあたりまえ、椅子を経由してテープ
ルの上に乗るなどすでに大人の猫のようだ。化粧棚に登つて化粧品
から何からめちゃくちゃにされたときはさすがの百合でも手を出し
たい衝動に駆られそうになるほどだつた。

百合が住むアパートは玄関に小さな出入り口がある。ペット達が
そこから自由に出入りするためのものだ。百合は今までその出入り
口をガムテープで塞いでいた。何も分からぬ赤ん坊のうちから外に
出すわけにはいかない。事故に巻き込まれるかあるいは迷子になつ
てしまふだろう。だからこそ出入り口を封鎖していたのだ。しかし
いつまでも外に出られないわけにはいくまい。外の世界にも行つてみ
たいだらうしひつまでも部屋の中だけで生活していくはストレスも

溜まつてしまふだらう。

「ついにこのときが来たか」

ひとり感慨深い気持ちになりながら百合はそのガムテープを少しずつ丁寧に剥がし始めた。カシスが不思議そうにこちらを見ている。ガムテープを全て取り終えてもじつと見てるだけだ。きっと理解していないのだろう。百合はそつとその扉を押した。キイッと小気味よい音が響き玄関の床面に日が差し込む。カシスはそこでようやく氣付いたようだ。玄関に駆け寄る。おずおずと首だけを外に出しあたりを見渡している。警戒しているのか、それとも未知の世界に怖がっているのか。だがその時間は長いものではなかつた。じきにカシスはまるで慣れているとでも言つよつに軽快に外に飛び出した。思わず慌てて扉を開ける百合。

「ちゃんと帰つてくるのよ」

去り行くカシスを見つめながら叫んだ。無事帰つてくるだろうか？不安で仕方がない百合だつたが、その心配は杞憂に終わつた。どうやらカシスはこの家を自分の住処だと理解してくれていたようだ。

「へへ、すごいじゃない」

とある喫茶店。明子はティスプーンで「コーヒーをかき混ぜながらさして面白くもなさそうに言った。

「すごいでしょ、やっぱカシスは偉いわあ。」

百合は明子の態度にまったく気付いていないようだ。嬉しそうに

?彼?の話をしている。

「でね、カシスつたらね・・・

「ねえ、もういい？」

「え？」

「私はあんたの猫の話なんか聞きたくないのよ」

「猫じゃなくて彼と言つて」

「それがもういいつつてんの。口を開けばカシスカシスつてさ。

いい加減に目覚ましたら？」

そこで百合はようやく明子の様子がいつもと違つてることに気が

付いた。

「何よ？どうかしたの？」

「別に。いい加減あんたの話聞いてあげてるのも疲れたのよ。あんたのペツトの話なんて興味ないの」

明子の言葉にかつとなつた。

「ペツトじゃない。カシスは私の大事な彼なの」

「また始まつた。たかが猫でしょ、何が彼よ。頭おかしいんじやないの？」

「おかしくなんてないわよ。何？急に。おかしいのはそっちでしょ。カンシャク起こしちやつて。例の彼氏と喧嘩でもしたんじやないの？」

明子の表情が険しくなつた。何も言い返さない。

「なあんだ、図星？私にハツ当たりしたわけね」

明子は押し黙つたまま口を開かなかつた。

「話したくないならいいわ。それじゃ」

百合は伝票を掲むと明子を尻目にレジへと向かつた。

その夜の事だつた。百合はまた時計に目をやつた。もう何十回目となる。時刻は22時。いつもならとつぐに帰つてゐる時間だ。だが今日はまだ帰つてきていない。帰宅すると部屋にはすでにカシスの姿はなかつた。百合は夕食も摂らずカシスの帰りを待つた。探しにいこうか？ そう思つたがカシスが行くところなど検討もつかない。もしかして連れ去られた？ それとも何か事故に巻き込まれたとか？ 悪い方向にしか考えが行かない。百合はいても立つてもいられなくなつてきていた。とは言え自分には何もできない。こいつやって悶々としながら彼の帰りを待つしかないのだ。再び時計を見る。大して針は動いていない。まるで時間が進んでいないかのよつだ。

「だめだ、やつぱ探しに行こ。」

そう言つなり百合は玄関へと駆けた。動きやすいようスニーカーを下駄箱から出す。本当はそんなことをする時間すら惜しいのだが。

スニー カーを履くなり部屋を飛び出した。カシスが行きそうな場所・分からぬ。そういえば首輪を付けるのが可哀想だと思い一度も付けたことがなかつた。それゆえ一緒に散歩に行つたことがない。とおりあえず百合は走り出した。

「カシスー！カシスー！」

夜も遅い時間だというのに百合はお構いなしに大声でカシスの名を叫びながら走つた。近所の公園、住宅地、河川敷。心身共に疲れきつて走れなくなつたとき、すでに東の空は白み始めていた。

（とおりあえず帰ろう。疲れちゃつた）

百合は後ろ髪を引かれる思いで家路に着いた。

「ただいま」

いつもの癖でつい口を突いた。誰もいないはずの部屋は寂しく百合の声だけを響かせる。いや、声だけじゃない。小さく力チャ力チヤという音が聞こえる。そう、まるでフローリングの床の上を動物が歩いているような。百合はもどかしそうにスニー カーを蹴り脱ぐと居間へ飛び込んだ。

「カシス！」

突然の大声に驚くカシス。だがそれもいつものこととすぐにいつもどおりの素知らぬ表情に戻つた。百合は近づくなりカシスを抱きしめた。苦しそうにもがくカシス。いつもどおりの光景だ。

「バカ、どれだけ心配したと思ってるのよ」

そう言つて優しく頭を撫でる百合。その手が止まつた。何かを摘んでいる。動物の毛だ。

「この毛、カシスのじゃない・・ちよつとカシス、これ誰の毛よ？」
そんな質問に答えるはずもなくカシスは百合の隙を見て腕からするりと抜けていった。

「あんた・・まさかよその子と遊んでたんじや？」
だんだんと語尾が強くなる。その気配を察してかカシスは部屋を飛び出していった。

「待ちなさい！」

慌てて追いかけるがとても追いつくはずもなく、カシスは再び玄関を出て行つた。

「この浮氣者……！」

百合の叫び声が朝焼けの街に響いた。

「で、解決したの？」

数日後のオフィス。ようやく仲直りした明子に早速カシスの浮気の報告をしたのだつた。

「解決つていう解決はしてない。何も言ってくれるわけじゃないし。とりあえず今回は特別に許してやることに決めたの」

「まあそういうらち空かないしね。ってかほんとに恋人みたいね。『これ誰の毛よ？』なんて最近の曇ドラでも聞かないつーの『あはは。でもあれ以来おとなしくなった気がする。あんまり外にも行かなくなつたし』

「田当ての子にフられて落ち込んでるんじゃない？って冗談よ。そんな目で見るんじゃない」

明子の言葉につい目つきを鋭くしてしまう百合であつた。

「そーだ、言い忘れてた。いいワインが手に入つたから一緒に飲もうよ。久々にカシス君も見たいしわ」

「いいね。じゃあ今夜早速」

午後5時。百合、そして明子は定時ちょうどに会社を後にした。本当は一秒でも早く家に帰りたかった百合だったが一旦一人で明子の家に寄ることにした。

「ほら早く早く」

「そんな急かさないでよ。着替えくらいいいでしょ。そんな急がなくたつてカシスは逃げないって」

明子を急かしに急かし足早に我が家へ向かう百合。数日振りの親友との酒の席のこともありいつも以上につきつきとしている。しかしやはり一番嬉しいのはようやくカシスと再会できることだ。

「ただいまー！」

元気よく扉を開ける百合。そこにはいつものように愛らしい顔のカシスが、いなかつた。

「お邪魔しまーす、おーいカシス。あれ? どうしたの?」

直立不動で固まつたままの百合。明子が不審気に百合の目線の先を見る。そこには体を小さく丸めたままぴくりとも動かないカシスの姿があつた。

数時間後、二人は動物病院で獣医と対峙していた。

「胃に大きな穴が空いていました。おそらく、ストレスによる胃かいえんだと。最近の様子はどうでした? 食欲がなかつたり元気がなかつたりしませんでした?」

百合はかすかに頷くことしか出来なかつた。最近おとなしいとは思つていた。しかしさかそんな深刻な症状を抱えていたなんてまつたく氣付かなかつた。明子が口を開く。

「あの、ストレスつて・・例えばどんなことが? 多分彼女には思い当たらないと思うんですけど」

「そうですね。たとえば外に出してもらえないとか、遊ぶスペースが極端に狭いとか。大きな物音が頻繁にするのもよくないですよね。大きな声も。もしくは・・そう、可愛がりすぎていたとか」

「可愛がりすぎがよくないんですね?」

「犬と違つて抱きしめたりしても嬉しくない子つてのも少なくない。むしろ体の自由を奪われてストレスを感じるでしょうね。」

百合はほとんど麻痺してしまつた頭で考えていた。大きな声、確かに毎日大きな声で驚かしてはいたかもしれない。今思えば抱きしめたりキスをしたりしているときの彼の様子は、少なくともすごく嬉しいという態度ではなかつたかもしれない。彼に対する愛情は全て彼には負担になつてはいたということだろうか。今まで私が一生懸命注いできた愛情は全て彼を蝕む要素になつてしまつてはいたといふのか。

「まあとにかく、可愛い可愛いだけではなくきちんとペチトの気持

ちも考えながら飼つてあげることです。次からの子はや」を氣をつけるといいでしょ。『冥福をお祈りします』

あれからゞのゞの日々が経つただひつ。百合は相変わらず放心状態だった。

「気持ちは分かるけどさ、そろそろ切り替えよつよ。いつまでもそう思いつめてたって辛いだけじゃん」

明子はコーヒーにたっぷりのクリープと砂糖を入れてかき混ぜた。百合に差し出す。少しだけ口をつけた。

「おーしゃー」

「こんなときはやっぱおいしいものを食べる。もしくは癒してくれるヒトを探す！つてことで、そろそろ行こうか」

喫茶店を後にする。今日は日曜日、新しい出会いを求めて街へ繰り出してきたのだ。

「ナンパ待つならやっぱ駅前かしら？いや、女一人でカラオケつてのも以外にくるなあ」

揚々と歩を進める明子。その姿に少なからず元気付けられる百合だつた。

（そうだよね、そろそろちゃんと人間の彼氏探さないとね。）

そう思いながらふと、ある店の前で自然と足が止まってしまった。「どしたの？」

「これは、まさに運命の出会いよ」

少し前に聞いたセリフ。いやな予感を感じつつ明子は百合の目線の先を見た。

「・・今度は犬か・・」

もうこの娘に普通の恋愛は無理だな、そつと心の中で親友を哀れむ明子であった。

一夜ハ愛（前書き）

恋愛とは必ずしも1対1で成立するとは限りません。一方的な愛情、それもまた恋愛の一つです。それと同時に、愛とは必ずしも美しく完結するところのものではありません。たとえそれがゆがんだ愛でも、愛は愛なのです。

一夜ハ愛

倉橋家。この辺りの人間でその名を聞いて知らぬものはまずいな。家は昔から代々の資産家で、今の当主、つまり主人は大手経営コンサルティング会社の社長である。倉橋家の敷地はまさに広大と言つても過言ではない広さだった。家自体ももちろん大きい。更に庭はあるでそこで野球でもするのではないかと思わせるほどの広さを誇っていた。それで知らぬ者などいようはずがない。しかし倉橋家が有名なのはそれだけではない。家族の仲の良さも近所で評判だつた。主人である倉橋孝雄を筆頭に、妻の香苗、大学2年生の長男幸雄、高校1年生の長女愛の4人は、まるで絵に描いたように仲睦まじい家族だつた。香苗は元ミス日本という輝かしい過去を持ち、その遺伝子を色濃く受け継いだ幸雄と愛もそれぞれ美男美女に育つた。

「愛、起きてるか？」

ある夜のこと、ドアをノックする音が愛の部屋に響いた。兄の性格を思わせるような優しい響きだと愛は思った。

「うん。どうぞ。」

ドアを開け幸雄を招き入れる。

「どうしたの？こんな時間に。」

「いやあ、最近俺も愛も勉強が忙しくてあんまりゆっくり話もしないだろ。明日は休みだし、たまにはこうして語り合つのもいいかなと。」

「何それ？変なの。」

愛は笑いながら、ベッドの縁に腰掛けた。幸雄も寄り添うように隣に座る。

「今日は満月だ。電気消して見てみるか？」

「そうなの？どおりで外が明るいと思った。」

上半身を後ろに捻り窓から空を覗く。真丸い月がいつもより強気に自己主張している。その時だつた。ふつ。と、突然部屋の明かりが失われた。きやつと短く声を発する愛。

「停電？」

「どうかな？大丈夫かい？」

幸雄は愛の腕を掴んだ。

がしゃーん！

「きやーつ！」

ガラスの砕け散る音。そして何者かが部屋に侵入してくる気配があった。

「だ、誰だお前は！」「

目が慣れないながらも必死で愛を自分の背に隠す幸雄。愛は兄の背中越しから侵入者を見つめる。月明かりのおかげで思つたより早く目が慣れてきた。見覚えのある顔だ。牛乳瓶の底を連想させるような円形の眼鏡が目に付く。

「その眼鏡、もしかして安藤君？」

「知り合いか？」

「同じクラスの安藤智樹君。なんでこんなことを？」

智樹は愛の口から自分の名が聞こえたことに高揚を感じずにはいられなかつた。

「ああ、愛ちゃん。もっと僕の名を呼んでくれ。」

口を不気味に歪ませて両手を広げる。その右手にきらりと光るのが見られた。果物ナイフだ。

「何なんだ、お前は。」

幸雄は後ろ手に愛の腕を握り、愛の体を隠すようにぐっと胸を張つた。それを見た智樹は歪んだ笑顔を引っ込め、幸雄に向けて果物ナイフを突き出し睨み付けた。

「おい、離れるよ。僕の愛ちゃんにくつ付くんじゃない。」

「お兄ちゃん。」

兄の服をぎゅっと握り締める愛。幸雄は智樹から田を離れないまま小声で愛に囁いた。

「いいが、俺が合図を出したら下に逃げるんだ。」

幸いなことに3人の配置は、ドアに近い位置に愛と幸雄、智樹は部屋の反対側の窓側にいた。

「早く離れる。愛ちゃん、さあ僕のところへおいで。」

一歩、また一歩。じわじわと近づいてくる。それに哈ませるようじりじりじりとドアの方へと後ずさる一人。そして、

「今だ、行け！」

幸雄が叫ぶと同時に愛は駆け出した。すばやくドアを開け廊下へ飛び出す。廊下もやはり部屋同様に明かりは消えていた。次いで幸雄も飛び出した。智樹が来る前にドアを閉める。せめてもの時間稼ぎだ。階段は愛の部屋を出てすぐ右にある。全速力で、しかし踏み外さないように確実に駆け下りていく。

「待てえーっ！」

一瞬の間を空けて智樹が追いかけてきた。声に殺気がこもっている。

「父さんの書斎に入るんだ！」

一階には居間やキッチン、その他いくつかの部屋にはすべてドアがある。そこに逃げて先ほどのように時間を稼ぐよりはドアが一つしかない孝雄の書斎に逃げ込む方が確実だ。書斎のドアには鍵も付いている。2つドアをやり過り、3つ目のドアを開け飛び込む。

「お兄ちゃん、早く！」

すばやく体を滑り込ませドアを閉める。鍵を掛けた瞬間、ノブを掴み激しく捻ろうとする音が聞こえた。

「開けろおー愛ちゃんを出せー！ ブツ殺すぞー！」

「な、何なんだよ、あいつは。頭おかしいんじゃないのか？」

「普段はあんな、あんなこと、する、人じゃないのに。」

愛と幸雄は肩で大きく息をしていた。冷や汗というやつだろうか、

体中がじつとりとしている。そよそよと吹く込む風が気持ち良い。風？几帳面な父が窓を開けたまま書斎を離れることがないはずだ。まして夜となればなお更だ。一人の顔から血の気が引いた。窓に田をやる。割られていた。

「お兄ちゃん。」

すぐさまに寄り添う愛。すぐ背後に気配を感じた。

「なに幸雄さんにべつたりくつ付いてんのよ、あんた。」

「きやーっ！」

絶叫して幸雄の背に飛びのぐ。

「誰！？」

「まさか、浅賀さん？」

そこに立っていたのは幸雄の1年後輩の浅賀美佐だった。幸雄を見つめる、印象的な大きな瞳は暗闇であるのにきらきらと輝いて見えた。

「こんなところで何してるんだ？」

「停電はまさかあなたが？」

美佐は幸雄を見るときとはまるで対照的な冷め切った目を愛に向けた。

「停電？ああ、まさにちょうど良いタイミングだつたわ。まるでこの家が私を受け入れてくれる段取りをしてくれたみたいに。ね、幸雄さん。」

再び先ほどの瞳で幸雄を見つめる。

「どうこうつもりなんですか？」

美佐は円を見上げ、芝居じみた調子で言つ。

「どうもこうもないわ。こんな綺麗に満月が輝く今宵、私たち一人は結ばれるのよ。」

「何を言つてるんだ？」

不意に顔を幸雄たちの方に戻した。田は冷ややかだ。愛を見ている。すいと一步近づいた。

「私は幸雄さんのことなら何でも知っているわ。身長体重から、好

きな食べ物に服の趣味。もちろん妹のことが好きだつてこともね。後半のセリフは苦々しくはき捨てるような声だつた。

「え？ それどういう・・・」

「そ、そりやあ妹のことは大事に思つてゐるさ。当たり前だらう。「とぼけなくともいいわよ。私は幸雄さんのことは何でも知つていいの。あなたは知らないんでしょう？ 幸雄さんがあなたの下着で毎夜毎夜何をしているのか。」

「で、でたらめを言うな！」

幸雄が今にも掴みかかりそうな勢いで怒鳴つた。それとは対照的に、美佐は恍惚の表情を浮かべてゐる。

「怒つてる顔も素敵ね。もつといろんな表情を見せて。」

「何をしているのか自分で分かつてているのか？」

「狂つてる。」

囁いた呟いた愛の言葉を聞き逃してはいなかつた。かつと目を見開く。

「黙りなさい！ 大体、あなたがいるから幸雄さんが私を見てくれないのよ。あなたさえいなければ。」

「待てよ。」

幸雄は、愛に掴みかかるとする美佐の前に立ちはだかつた。美佐はふうっとため息をつき、胸の前で、何かを払つよつて右腕をすつと横に滑らせた。

「うあつ！」

幸雄は左腕に鋭い痛みを感じ思わずつづくまつてしまつた。この女は刃物を持つてゐる。その時ようやく気付いたのだった。

「お兄ちゃん！」

「すぐ終わるから、お利口にして待つてね、幸雄さん。」

美佐はにじりとして、腕を押さえ苦痛に呻いている幸雄の脇をすり抜けた。

「逃げろ、愛。」

のどの奥から絞り出された声は、愛を突き動かすまでの力はなか

つた。美佐のゆっくりとした歩調に合わせて後ずさる程度しか出来ない。とん、と背中に当たる本棚。すぐ左手は窓に面した壁。部屋の隅に来てしまった。美佐は余裕の笑みを浮かべていた。

「幸雄さんを今まで独り占めしていたのは許せないけど、特別に許してあげる。一瞬で終わらせてあげるから、じたばたしちゃダメよ。」

右手のナイフを掲げた。血塗られて不気味に光るそれを見て、愛はもはや叫び声すら上げられなかつた。

竹下和也は部屋で一人考えていた。と言つても自分の部屋ではない。いつものように庭の木の上から部屋を覗こうとした矢先、突然家中の電気が消えた。その後何か叫んでいる声や物音が聞こえたが、声の内容までは聞こえなかつた。きっと突然の停電に皆が騒いでいただけなのだろうと思っていたが、なかなか電気が点かない。不信に思い、意を決して家の中の様子を見に行くことにした。自らの境遇を鑑みて、

(こんなことは俺の意識に反するんだが。)

和也は雨どいを伝つて二階へよじ登ろうと試みる。だがうまくいかない。どうも靴が滑つてしまつようだ。

(慣れなことは仕方ない、靴は脱いでいく。)

苦労して愛の部屋のベランダに降り立つたとき、窓ガラスが割られていることに気がついた。ただの停電ではない。慎重に部屋の中を見渡した後、進入した。そう、和也が今いる場所は愛の部屋だつた。窓ガラスの破片を踏まぬようゆっくり歩く。部屋が荒らされた形跡はない。窓から見て左手にあるタンスに目が行つた。近づき、一段開ける。洋服がきちんと整理されていた。和也は愛の部屋着姿が好きだつた。どれも品があり趣味が良い。そつと戻し、一つ下の段も開ける。そこには下着が収められていた。一分のずれも見られないほど綺麗に並べられている。

(窓を割つて乗り込んでくるような逸脱したことをしておきながら、

下着を漁るというストーカーじみた行為にはおよんではない。部屋に侵入してきたやつはただの強盗か、或いは相当余裕がなかつたか、だな。）

下着の群れの中に手を入れ、列を崩さぬようそつとその中の一枚を取り出した。自分の鼻に押し当て、思い切り息を吸い込んだ。思わず口元が緩みそうだ。その時、隣の部屋からカタツという物音が聞こえた。緊張が走る。隣の部屋は確か兄の幸雄の部屋だ。下着をジヤケットのポケットにしまい、音が立たぬようそつとタンスを閉めた。部屋のドアは開け放しだ。そこから廊下の様子を探る。右手は一階に通じる階段。左手には、こちらから見える形で通路がＬ字型に続いている。ここ以外にドアは3つ。兄、そして両親各一人ずつの部屋だろう。人の気配はない。

（幸雄の部屋にいるのは誰だ。幸雄と、そこに逃げ込んだ愛さんか？それとも侵入者？幸雄と愛さんだとして、なぜ会話すら聞こえない？では、侵入者？いや、愛さんの部屋から進入しておきながらなせ兄の部屋に隠れる必要がある？どちらにしても不自然だ。）

和也は幸雄の部屋へ入つてみることにした。慎重にドアを開け、中の様子を伺う。部屋の造りは愛のそれと間違だつた。入つて右手奥に机、その後ろにベッドが置かれていた。こちらも愛の部屋同様一分の隙なく綺麗に片付けられていた。いや、一つだけおかしい。机の上が多少散らかっている。勉強の途中だつたのだろうか？それにしても乱れすぎているような気がする。考えすぎだろうか、ただそのような性格なのかもしれない。誰もいないようだ。窓が開いている。風で何かが揺れた音だつたのか。ほつと息をつき、そして気付く。窓はまだ開いているのではなかつた。窓の中央付近が小さく割られていた。そこから手を入れて鍵を開けたのか。つまり何者かが進入してきたということだ。そして、やり口から考えるに愛の部屋に侵入してきた者とは別人で、共犯者ということでもなさそうだ。部屋の中央に歩を進める。こちらのタンスは愛のものより大きい衣装ダンスだった。観音開きのその扉は、右側が微かだがきちんと閉

められていなかつた。

(なるほどね。)

普段から護身用にと持ち歩いているバタフライナイフを取り出した。慎重に、じりじりと近づいていく。

音楽鑑賞が唯一の趣味である倉橋孝雄は、完全防音である音楽鑑賞専用の部屋でいつものようにワインを片手にクラシックを楽しんでいた。アイマスクをしてその世界に入り込む。しかし、不意にその音楽が止み、現実に引き戻された。アイマスクを取つても、同じように部屋が暗闇に包まれていた。少し腰を浮かす。

(停電か？まあすぐに戻るだろう。)

リクライニングチェアに座りなおし、手探りでワイングラスに手を伸ばす。一口喉に通すと、すぐに気分が良くなつた。静かな闇もまたいい。

(もう少しゆっくりして動き出すかな。今日は香苗も田を見ますことはないだらうしな。)

孝雄はにやりと笑い、グラスをテーブルへと戻した。

ぱりい　ん！！

見ずに戻すなど慣れたものだつた。しかしいつもとは勝手が違つていたせいがグラスを落としてしまつたよつだ。

「ちつ。

片付けるか、と起き上がつた。だが相変わらず真つ暗だ。思わずアイマスクを取る仕草をして、自分でふつと笑つてしまつた。

「痛つ。破片を踏んでしまつたか。まったく孝雄は何をやつているんだ？どうせブレーカーが落ちただけだろう。すぐ入れなおせばいいものを何やつて・・・」

そこではつとした。

「まさかあいつ・・・！」

グラスの破片を踏まないようにはじめに慎重にドアまで辿り着く。部屋を飛び出しすぐ隣の部屋へと駆け込んだ。キングサイズのベッドでは

妻の香苗がすやすやと寝息を立てていた。ずかずかとベッドに上がる。こんなことで目を覚まさないことは実証済みだ。枕もとに飾つてある日本刀に手を掛ける。飾りといつても、その切れ味は本物だつた。鞘ごと掴み、再び大股で部屋を後にする。一人はどうだ？

「幸雄め、愛は俺のものだぞ！」

廊下を直角に曲がつてすぐの部屋。幸雄の部屋だ。物音が聞こえた。そこにいるのか。

「幸雄お。」

部屋に入るなり怒鳴る。目が合つたその男は、まだ目が慣れぬ月明かりの下でもはつきり分かるほど幸雄とは似ても似つかぬ男だった。

「だ、誰だお前は！」

日本刀の切つ先を相手に向けた。

（なんで刀なんか持つてんだよ？）

あまりのことに和也は固まつてピクリとも動けなかつた。

「泥棒か？お前がブレーカーを？」

二人は対峙したまましばらく動かなかつた。

（隙を見て逃げるしかない。）

和也はじわじわと後ずさつた

（このベランダの真下は芝生が広がつていた。この日本刀男が階段を下りて追いかけてくるころにはなんとか立ち上がり逃げられるはずだ。）

静寂は突然切り裂かれる。一階から、ガチャガチャと激しくドアノブを回す音が響いた。その瞬間、弾かれたように和也は動き出した。後ろへ振り向き一目散に窓の方へ走る。待て！男のあわてた声が聞こえる。大丈夫、逃げ切れる。そう思った瞬間、足の裏に激痛が走り、体がぐらついた。

（窓ガラスの破片だ。）

それが和也の最期の思考だった。

一階ががたがたと騒がしい。相変わらず愛と幸雄が逃げ込んだ部屋のドアは開かない。智樹は隣の部屋に一時身を隠すこととした。物置部屋のようだ。窓が小さいせいで部屋を見渡すのに苦労した。どうやら季節はずれのファンヒーターや冬物の服がきちんと整理されているようだった。愛たちが逃げ込んだ部屋に面した壁に耳を当てて様子を伺う。話し声だろうか、よく聞こえない。これでもかといつほどに耳を押し当てる。その時だった。

「きやああ　っ！」

愛は絶叫した。振り上げられたナイフを前に、死を悟り目を閉じた。

「あ、あれ？」

不自然なまでの間を感じ、恐る恐る顔を上げる。

「お兄ちゃん！」

幸雄が美佐を後ろから羽交い絞めにしていた。

「は、離しなさい！」

激しく悶える美佐。幸雄は左腕の激痛に意識を持つていかれそうなのを必死でこらえた。

「つおおーっ！」

気合とともに、美佐を羽交い絞めにしたまま大きくのけ反る。そのままジャーマンスープレックスの要領で美佐を床に叩きつけた。ぐしゃっとこう感触を腕に感じながら、幸雄はのろのろと立ち上がった。

「愛。」

「お兄ちゃん！」

駆け寄る愛をぎゅっと抱きしめた。

「死、死んじゃつたりしてないよね？」

美佐は不自然に首を曲げたままピクリともしない。

「たぶん、な。」

「警察に通報しなきや。」

「ああ、でもちょっと休ませてくれ。ここなら鍵もかかってたさつきの・・・」

「安藤君？」

「そう、安藤。あんなやつに君付けしなくていいよ。あいつも入つてこれないだろ。」

そう言って幸雄は愛を抱きしめたままその場にしゃがみ込んだ。

「怪我の手当してしなきゃ。」

「大丈夫。それより、愛。」

「ちょ、え？ 何？」

幸雄が顔を近づけてきた。キスでもするかのよつと。体もやけに摺り寄せてくる。美佐の言葉が愛の頭をよぎる。「幸雄さんがあなたの下着で毎夜毎夜何をしているのか。」

「やめてよ。」

両手を突き出すよつと兄を引き剥がす。

「とりあえず安藤君の隙を見て私の部屋に逃げよつ。一階より二階の方が安全よ。ケータイも部屋にあるし、そこから警察呼ぼつ。お父さんたちにも言わなきゃ。」

「・・・そうだな。」

二人は立ち上がり、もう一度美佐が起き上がらないかと確認した後にドアに向かった。耳を当て廊下の様子を伺つ。

「どう？」

「何も聞こえない。もしかしたら外に回つたのかも。」

「じゃあやつぱり一階に行つた方がいいよ。」

そつとドアを開ける。左右を素早く見回し、智樹がいないことを確認した。

「よし、今だ。」

一田散に階段を田指す。恐怖や疲れのせいか、足が重い。だからと言つて速度を緩めるなどしようものなら智樹がいつ隙を付いてくるとも分からぬ。ちょっととの距離なのに息が切れる。階段は更に堪えた。一段一段上るたびに体が重くなる感じだった。上りきると

きにはもはや歩いている程度の速度だった。

「つ、着いた。」

部屋に入るなりベッドに座り込んだ。

「警察に電話を。」

「幸雄おお。」

殺氣を帯びたような不気味な声に一人してどきりとした。ドアを閉めるまもなく誰かが飛び込んできた。血まみれの男。

「お・・お父さん。」

「どうしたんだよ？ 怪我でもしたのか、父さん。」

「黙れ。幸雄、お前が愛をどう想おうが勝手だ。だが手を出すのだけは許さん。」

孝雄の目はもはや正気を失っていた。

「何言つてんだよ。つてか・・その刀・・」

「愛は俺のものだ！ 誰にも渡さん！」

柳田正敏は震える手で衣装ダンスの扉を開けた。足元には真っ二つに切り裂かれた青年が横たわっている。正敏は果然とした頭で考えていた。昔から自分は他の男とは違うと思っていたが、何が違うのか、自分でも分かつていなかった。それを気付かせてくれたのが幸雄だった。正敏は男でありながら、あまりに整った容姿を持つ倉橋幸雄に惹かれてしまったのだ。高校入学で出会って以来、ずっと想い続けてきた。そして今日、その思いに決着を着けようと思いここへ来たのだ。寝首を搔こうとロープを持参して。どうせ結ばれることはない、ならばいつそ幸雄などいなくなってしまえばいい、と。それが、何なのだ、この様は。なぜ見ず知らずの青年が切り殺されるシーンを見る羽目になつたのだ。

「愛は俺のものだ！」

となりから絶叫が聞こえた。先ほどの日本刀男、幸雄の父である倉橋孝雄だ。正敏は、死体が握っているバタフライナイフを手に取りベランダに出た。そこから愛の部屋のベランダへと飛び移る。気付

かれぬようにそつと中を覗いた。じめに背を向けて幸雄の妹の愛、幸雄が立っている。一人に対峙するように孝雄がこちらを向いてた。今なら幸雄を殺せる。いや、その前に孝雄に切り殺されるだらうか。今はまだ身動きは取れなかつた。

叫び声が聞こえたときは冷や冷やしたが、声から察するに、愛は無事のようだ。智樹はほつと息を付いた。その後、一人が階段を駆け上がる足音が聞こえた。駆けている、といつほどのスピードとは思えなかつたが。それから少しして、男の声が響いた。

「愛は俺のものだ！」

誰だ？ 兄の幸雄？ 父の孝雄？ どちらにしても家族という意味での言い方としては不自然だ。まるで自分の女だといつも。そう思つたとたん、頭にかつと血が上つた。俺のものだと？ 馬鹿が！ 愛ちゃんは僕のものだ！ 智樹はナイフを握りなおし、部屋を飛び出した。一気に階段を駆け上がる。

「愛ちゃん！」

「あ、お前！」

「安藤君。」

「何者だ？ お前は。」

「こちらに背を向けていた男がこちらを振り向く。おそらく父親の孝雄だ。その手には、

「刀！？」

智樹はドアの手前で立ち止くした。ちらと愛を見やる。併せて、幸雄に寄り添つてゐる。幸雄の腕が愛を庇つよつて後ろへと回された。

た。

「何触つてんだよー愛ちゃんから離れろおーー

再びかつとなつた智樹は刃物を持つていない幸雄へと一気に切りかかつた。

「きやあああつー

「馬鹿野郎。」

田の隅に孝雄が何か咳くのが見えた。

「愛は俺のものだつて言つてんだろうがつ！」

「ずどんっ！」

そんな衝撃だつた。一瞬にして智樹の体は上半身と下半身に分断されたのだった。

「あ、ああ・・」

もはや愛の喉からはまともな声はでなかつた。擦れたうめき声がもれるだけだ。幸雄は足元に転がる智樹の腕に田をやつた。ナイフは握つたまま。すぐさまそれを奪い取る。愛が何かを叫んだのはその時だつた。

静寂は崩れた。また新たに男が現れたのだ。その男は一瞬怯んだ様子を見せたものの、何かを叫びながら幸雄の方へと突っ込んでいつた。幸雄も孝雄も完全にそちらに気が行つていた。今だ。窓から飛び込み幸雄に切りかかる。幸雄はこちらを背にしゃがんでいた。ベッドに飛び乗り完全に背後を取つた。

「お兄ちゃん！」

余計なことを！幸雄の背中がピクリと反応するのが分かつた。

「邪魔だ！」

愛を殴り倒しもう一度幸雄を見る。遅かつた。素手だつたはずの幸雄の腕には果物ナイフのようなものが握られていた。そしてその切つ先は今まさに正敏の心臓めがけまっすぐに刺さつていた。手からバタフライナイフが零れ落ちる。そうか、今切り殺された男が持つていたナイフ。これを拾うためにしゃがんでいたのか。理解し終えたときにはもう、正敏の思考は完全に停止してしまつた。

「柳田か？何なんだ、次から次に。」

正敏の胸からナイフを引き抜き、すぐに孝雄へと向き直る。すでに孝雄は攻撃を仕掛けてきていた。

「おおおおおっ！」

気合とともに振り上げた刀を一閃。

「くそおつ！」

幸雄は間一髪でそれをかわすと、背後に回りこみ孝雄の腰あたりにナイフを突き立てる。体重を乗せぐりぐりとねじ込む。

「ぐあああっ！」

苦痛の呻き。どうにか体をひねり幸雄を振り払う。すぐさま刀を構えた。しかし膝を上げることすらままならない。幸雄は武器を探した。そうだ、正敏が何か持っていたはずだ。どこに落とした？ 孝雄を牽制しつつ刃で部屋を探る。見つけた。幸雄と孝雄のちょうど中間の当たりに、月明かりに鈍く光る刀身が見えた。

「うぐぐ・・」

孝雄は腰の激痛のせいか目の焦点が定まつていない。今だ。飛び込むように転がりナイフを拾う。立ち上がったときにようやく孝雄が焦った様子で動き出した。しかしまだ構えてもいいない。勝つた。

「死ねえ！」

がつ。突然体が止まつた。後ろから誰かに羽交い絞めにされたのだ。

「幸雄さん。私なんて仕打ちを・・・」

「浅賀！離せ。」

「もう離さないわ。一生一緒に・・・」

「そんなことを言つてる場合じやあないんだ、このバ・・・」

不意に声が出なくなつた。いや、出たかもしれないが少なくとも幸雄自身の耳には届いてこなかつた。背後の美佐もろとも、日本刀に胸を串刺しにされていた。そのまま日本刀ごと突き放す孝雄。幸雄と美佐はぴたりとくつ付いたまま、一人して床に突つ伏した。

「願いが叶つたじゃないか。なあ、愛。」

孝雄は愛に向かつて笑つた。だがそれはとても今までの父のそれとは似ても似つかぬ、恐ろしく不気味な、歪んだ笑みだつた。

「さあ愛、二人きりになつたな。もう怖くないぞ。ふふ、父さんが慰めてやる。」

じりじりとにじり寄る孝雄に、愛は顔を引きつらせて後ずさつた。

「さあこひへおいで。」

更に一步踏み出した。孝雄の腕が愛の足首を掴むつとしたままで

その時、

どおん！

左太ももの激痛につめき声を上げる。

「きやああつ！」

信じられないと言つた顔でドアの方を見やる孝雄。そこには孝雄と同年代ほどの中年の男が一人立つていた。手には拳銃が握られている。

「ブレーカーを落として、お前が配電盤のところに来たらこれでズボン、の予定だつたんだが。なかなか来ない上にやけに騒がしいと思つたらこの様だ。一体何があつたんだ？」

男の右手には黒光りする鉄の塊が握られている。そのときよひやく、先ほどのは銃声だつたのかと気付いた。

「お前は、誰だ？」

「どうせ覚えちゃいないんだろうな。俺たちが大学生のころ、お前は金に物を言わせて俺の彼女、相田美津子を自分のものにした。その後、散々彼女を弄んだ挙句、ゴミくずのように捨てやがつた。」

「お前、谷山か。もう30年も前の話じゃないか。今更何を・・・」

「予想通りの発言だな。お前はその程度にしか人を見れないんだ。俺みたいに一途に一人の女を愛せないのか？なあ、美津子。」

谷山は上着のポケットから何かを取り出した。愛おしそうにそれに頼りをする。愛はそれを見た瞬間卒倒しそうになつた。人の手だ。

「まさか・・・」

「美津子さ。こいつはもう俺を裏切ることはない。俺たちは永遠に愛し続けるんだ。そのために、忌々しい過去は消さなきやあいけない。そういうことだ。」

言い終わると、銃口を孝雄に向けた。

「待て、馬鹿なことは・・・」

「おん…

先ほどと同じ音が部屋中に響いた。余韻。そしてしばしの静寂。
「さて、お嬢さん。ひどい有様だねえ。こんななんじやこの先一人で
まともに暮らしていけるはずがない。安心しなさい、楽にしてあげ
るよ。あんな最低な男でも君の父だらう？後を追うといい。

男は優しく、そして冷酷に言い放つた。まだうつすらと煙の立ち
上る銃口を、今度は愛に向かって。

「目を瞑つて。大丈夫、一瞬だ。

もう終わりだ。愛がそう思つたとき、不意に谷山の体がぐらついた。誰かに押されたのだ。とは言え思い切りではない。1・2歩よろけても体勢はすぐ立て直せる。そう思つた。だが、部屋中に飛び散つた正敏の、或いは智樹の、或いは幸雄の、或いは恵まわしき孝雄の血液がそれを許さなかつた。踏み込んだ足はざるつと気持ちの悪い感触を伝えるだけで、谷山の体を支えてはくれなかつた。尻餅をつぐだけにどどまらず、上半身」とぐぢやつと血の海に沈んだ。銃が手から零れ落ちた。何事だ？とにかくまずは銃を。そのとき、頭上に影が落ちた。天井を見上げる。これは・・壺か？ そういえば階段を登つたすぐ右に飾つてあった。改めてみるとなかなか高価そ
うな・・
ぐしゃつ！

壺の破片と一緒に谷山の頭の肉片も飛び散つたようだ。全身に、生暖かく気持ち悪いものが散つてきた。

「お母さん！」

「遅くなつて」「めんね、睡眠薬を飲まされたらじくて今の今まで起
きられなかつたわ。怪我はない？」

よろよろと互いに歩み寄る。

「良かつた、お母さんも無事だったのね。」

ようやく辿り着き、強く抱きあう。

「愛も無事でよかつたわ。でも、ひどい有り様ね。」

「ええ。でも、ようやく一人きりになれたわね、お母さん。」

「うふふ。」

二人は見つめ合い、当たり前のように唇を重ねた。そのままベッドに倒れこむ。

満月が煌々と照らす夜。不気味なまでの静寂の中、愛と香苗の一人の吐息だけがいつまでも続いていた。

老人と若人（前書き）

恋愛に年齢なんて関係ありません。どんなに幼からうが、どんなに年をとつていようが、人を好きになる気持ちというのはあって当たり前のです。そして、その人を好きになるあまり、自分の世界に没頭してしまうことだってあり得るのです。どんなに見当はずれなことでも思い込んでしまえばそれがその人の世界なのです。

老人と若人

僕の名は香坂文人。いわゆる看護士という仕事をしている。病院というところはとても不思議なところだと思つ。患者さんの数だけ病気や怪我があつて、中には亡くなられる方もいる。そうかと思えば別の階では出産が行われ、新たな命が誕生している。人生というのは人ととの出会いの連続だ、これは僕の持論。おじさん臭いと思われるかな？でも本当にそう思う。病院だつてももちろんそうだろう？患者さんとお医者さん、看護士さんが出会う。人と出会うことってすばらしいことだと思つ。でもそのお医者さんと患者さんとの掛け橋が病気や怪我だと考へると、病気や怪我も悪いだけじゃないんじやないかと思つてくるから不思議だ。僕がなぜこんなことを言うかというと、ある一人の女性との出会い、それが僕にとってとても重要な出会いだったからだ。

「高坂さん、紹介しますね。今日からあなたの身の回りのお世話をする、香坂くんです。」

恰幅のいい体格をした小山先生が僕を一人の患者さんに紹介した。

「香坂文人です。よろしくお願ひします。」

ベッドに上半身だけを起こしてちよこんと佇んでいる一人の老婦人、高坂さくらさん。高坂さんはかすかに微笑み僕に会釈をした。その姿はとても暖かい春を連想させた。

（まさに名は体を表すとはこのことだな。）

僕は密かにそんなことを考えた。

その日から早速高坂さんのお世話をすることになった。食事を運び、食べさせてあげる。病気、そして高齢のせいもあり自分で箸を使つことが困難なのだ。

「ありがとう、あなた香坂さんだったわね。寄寓ね、私と同じ“こ

うさか”なのね。」

「そうみたいですね。字は違うみたいだけど、これは何かの縁でしょうね。」

僕がそう言つと高坂さんはくすくすと笑つた。

「僕何か変なこと言いました?」

「あらごめんなさい。いえね、若者らしくない発言だなと思つて。何かの縁だなんて。」

「あ、そうですか? あはは、恥ずかしいな。」

つい顔を赤らめて頭をぽりぽりと搔いてしまつた。

「その仕草もどうかしら?」

そして一人で顔を見合わせて笑つた。

「さて、食事も済みましたね。お薬も飲んだし、僕はこれで。」

「あら、もう行っちゃうの? もう少しお話でもと思ったのに。」

高坂さんが残念そうに顔をしかめた。

「すいません、ほかの患者さんのお世話をありますので。何かあつたらそのボタンを押してください。すぐに駆けつけますから。」

「ありがとうございます。それじゃあまた明日ね。」

「ええ、また明日。おやすみなさい。」

そう言つて僕は部屋を後にした。

ベッドに横たわる。少し体が疲れている。思わずため息が漏れた。働きすぎかな? 天井を見上げ、今日の出来事を振り返つた。

「高坂さくらさん、か。」

思い浮かぶのは彼女の顔だった。彼女のあどけなさの残る笑顔。接している時に感じる名前通りの心地よさ。自分とは2世代ほども違ひのある女性。なのに田を開じてもなお高坂さんの顔がちらついていた。

「まさか、僕・・・」

そこまで考えて自分で否定した。さつきも言つたように自分と彼女は2世代ほども歳が離れているのだ。まさか、ね。

朝日は少し早めに田覗めた。早速高坂さんのもとへ。

「おはよー」やこます。今日もいい天気ですね。はい朝ご飯です。
窓から差し込む朝日が目に痛いほどだ。

「おはよー。窓際のベッドはいいわね。他の方たちには少し申し訳
ない氣もするけれど。」

高坂さんが入っている部屋は6人部屋だ。今は2つが空きベッド
になつてるので実質4人がこの部屋に入院していることになる。
「申し訳ないだなんて。そんなことないですよね、監視です。」

他の3人の入院患者に呼びかける。

「もちろん。」

「気にする」となんてないですよ。」

「俺なんか窓際がいやでわざわざひいてしまったくらいだし
な。」

「変わったやつだなあ、あんたは。」

部屋中に笑いがこだます。高坂さんも楽しそうに笑つている。
その笑顔を見ると僕は余計に嬉しくなつた。

「お食事を食べ終わつたらお薬を飲んで、お皿まで寝ましょーか。
そう言つて部屋を出た。途端に寂しさを覚えてしまつた。

その日は毎夜と毎食高坂さんの食事のお世話をした。僕の担当
なのだから当然なのだが、他の患者さんのお世話もあるのでと、あ
まり高坂さんと喋るヒマもないままにそのままにその日は就寝を迎えてしまつ
た。

昨日と同じようにベッドの上で考えるのは高坂さんのことだった。
天井に高坂さんの笑顔が広がつてゐる。どうやら僕は高坂さんに患
者さん以上の感情を抱いているらしい。

「年甲斐もなく。」

ふとそんな言葉が口をつけた。高坂さんが聞いたら笑うだらうか
?若者らしくない、と。(あれ?でも年甲斐もなくって僕が言つと
おかしいか?いや・・まいいや、疲れているんだろ?。早く寝よ?)

)

あつとこづ間に意識は途切れ夢の中へ。

入院してから何日目かの朝。今日は高坂さんの体調検査の日だ。僕は昨晩からそわそわとしていた。検査の手伝いも僕が担当している。つまりいつも以上に一緒にいれる時間が長いというわけだ。僕の高坂さんに対する気持ちは日に日に増していくらしかった。

「どうですか？体調は。」

車椅子を押しながら僕は聞いた。

「もちろん良好よ。このままドライブに行きたいくらい。」

高坂さんの言葉に僕は吹き出しちゃった。

「あら、本気よ。」

「でも今日は昼前から生憎の雨ですよ。どうせドライブに行くなら晴れた日がいいですよ。」

「そう、雨なんだ。」

「元気になつたら晴れた日にドライブに連れて行ってくださいね。何気ない会話。それだけでも十分楽しかった。彼女とは60歳ほどの年齢の差がある。彼女が若いのか、それとも僕がおじさんくさいのだろうか？まあどちらでも構うまい。いつもやつて楽しく会話ができるばそれで十分だ。

やはりこの日はいつもの倍近く高坂さんとお話をす「ど」ができた。

「どうなかしら？無事退院出来る日は来るのかしら？」

高坂さんがぽつりとこぼした。

「どうしたんですか？急に。弱気になっちゃった？」

「だつてもう私もいい年よ。元気な人であつても急に逝つてしまつよくな年齢よ。」

高坂さんの言葉に僕ははつとした。気付かされた、いや気付いていたが考えないようにしていたのだ。

「大丈夫、元気になりますよ。一緒にドライブ行くんでしよう？」

僕には氣休め程度の言葉しかかけられなかつた。高坂さんも氣付

いているはずだ。高坂さんの状態がどのようなものなのか。僕は知らされていなかつた。それが普通だと思っていた。僕は患者さんのお世話をするだけ。治療に関しては指示されたことを行い、変に介入しない。それこそが僕の中の看護士だった。

「あなたには付き合つている恋人はいるの？」

突然の高坂さんの質問にびっくりした。そんなことを聞いてくるとは思つてもみなかつたからだ。

「あ、いえいないです。募集中です。」

そう言つてあははと笑つた。思つた以上に心臓は高鳴つていた。

僕は一体何を考えているのか。

今日は非番、つまりお休みだ。一週間に最低2日は休まなくてはいけないらしい。我が病院の決まりだ。なぜだろう？・働きすぎると疲れも溜まつて集中力が欠けてしまうからだろうか。たしかにそれは危ない。患者さんの命を預かる仕事だ。失敗やミスは許されない。休むのも仕方がない。だが正直に言うと休みなど欲しくはなかつた。そんなことをしたら高坂さんと会えないじゃないか。これといつて趣味のない僕は良い休日の過ごし方というのを知らない。一人暮らしなので自分で食事の用意しなくてはならない。料理は得意だ。特に和食。肉じゃがとか煮魚とか。ん？でもなぜ僕は料理が得意なんだ？一人暮らしだから仕方なく覚えたのか。作り方は・・・いかん、ど忘れして。きっと疲れているんだろう。しかしこれからどうしよう。とりあえず街にでも出てみようか。もともと出不精なのでめんどくさいという気持ちは否めない。だがどうだろう、考えようによつてはいいことなんぢゃないか？街に出て何かを見たり体験したり。それはそのまま会話のネタになる。つまり高坂さんに話すことが増えるつてことだ。いつもいつも今日はいい天氣ですねとかご飯おいしいですかとか、同じ内容では高坂さんもそのうち飽きてしもうだろう。そういうえばドライブに行きたいと言つていた。きっと彼女は外に出るのが好きなのだ。ならばいつも同じ話よりも週末ど

「どこに出かけてきましたよとか、そんな話の方が良いに決まっている。僕は早速寝巻きを脱ぎ捨て、ポロシャツに綿パンというお馴染みの格好に身を包んだ。もつと若々しい格好をしたら、とよく言われる。・・誰に？同僚？いや・・まいつか。僕は靴を履き勢いよく玄関を開けた。いい天気だ。春の陽気。ふと高坂さんの笑顔が脳裏をよぎった。僕は街に向かつて歩き出した。いや、バスだったかな？そう、バスだ。住んでいるアパートのすぐ目の前にバス停がある。そこから駅前の繁華街へと向かうのだ。バスからの景色は覚えていない。疲れのせいで眠ってしまったのだろう。しかしそこまでして話しのネタを探そだなんて。僕も相当変わり者だな。いや、それほど患者さんとの「ミニユニケーション」を大事にしているのだ。そう自分に言い訳しながらも思い浮かぶのは高坂さんと楽しく会話している姿だった。程なくしてバスは駅前のバス停に滑りこんだ。バスを降り、まず立ち寄ったのはファーストフード店。腕時計を見るともう昼前だったのでとりあえず腹ごしらえを、という具合だ。ハンバーガー1個とポテト、そして飲み物。男にしては量が少ないかもしれない。だがそれだけしか僕は食べないのだ。自分で少食というイメージはないがなぜだがそれだけしか食べなかつた。味は残念ながら記憶に残らなかつた。大して好きでもないし、第一頭の中はハンバーガーではなく高坂さんが占めていたからだ。食事を終え、一息ついて店を後にした。

（洋服でも見るか。）

僕はお洒落と言うものに人並みほどの興味もない。いい年してチヤラチヤラしたくないという思いがあつた。そういうと勘違いされるかもしれないがまだ21歳。若々しい格好をして何の違和感もない年齢であることは間違いないがどうもそんな気になれないのだ。職業のせいもあるだろうか。仕事中はもちろんネックレスやブレスレットなど着けられない。まあ大体の職業がそうなのだろうが。つまりところ、自分がファッションに興味ないだけだ。それをあれやこれやと言いくて見ているに違いない。無理やり自分を言いくるめ、

それでも話しのネタにと一軒の店に足を運んだ。店内は流行の音楽が掛かっていて、色とりどりの洋服が並んでいた。

「いらっしゃいませー。」

店員は若い女性だった。何気に商品を見渡しながら店内を進む。僕は話しかけられるのが好きではない。足は自然と店員とは反対方向に向かう。しかしどうやら店員も僕に買わせようと意欲を出しているようだ。だんだんと僕らの距離は狭まっていく。

「あ、それかなり人気ですよ。どうぞ試着してみてください。色違もありますんで。」

偶然僕が手に取っていた服を見て店員は満面の笑みで声を掛けてきた。頼んでもいらないのに次々とその場に広げていく。これと合わせるとかなり映えますよ、こんな組み合わせも最近の流行ですよね、これなんかも・・・僕は店員に勧められるままに服を受け取つていく。このままではあれもこれも買わされてしまう。焦った僕はどうにか理由を付けてそれらを断り、だからと言つて何も買わないのも気が引けたので大して欲しいとも思わないTシャツを一枚だけ買うことにした。

「ありがとうございます。」

店員は笑みを崩さない。僕はその内心をふと考へ、そしてそれをかき消し店を後にした。さてこんなもので高坂さんに楽しんでもらえるのだろうか? あてもなく歩きながらそんなことを考えた。そういえばさつき買ったTシャツの柄つてどんなだつたつけ? よほどどうでもいいものだったのだろうかちっとも思い出せない。困った性分だ。・・・今のは古い言い方だろうか?

「ハンバーガーなんてハイカラなもの、私は食べたことがないわ。」

翌日、僕は早速高坂の元へ昨日の報告を行つた。自分が感じたより高坂さんには楽しい休日のように感じてくれているらしい。ずっと笑顔を絶やさぬまま僕の話を聞いてくれている。

「ハイカラなんてものじゃないですけどね。じゃあ今度一緒に食べ

に行きましょう。」

「そうねえ、いつになるか分からなければど。」「何言つてるんですか、すぐですよ。」

そう諭す僕を高坂さんは笑顔で見てくれていた。そして、不意に意識が遠のく。顔からベッドシーツに突っ込んだ。高坂さんは僕を、いや、倒れたのは、高坂さん。そう、高坂さんだ。僕は高坂さんを抱き起こしナースコールを押す。目は微かに開いたままだった。天井がやけに白い。いや、僕は天井なんて見てない・・はずだ。

「高坂さん。」

名前を呼ばれ私ははつとした。

「もう清掃は済んだわね。」「はい。」

私は真っ白で皺ひとつないベッドを見た。ここに人がいた形跡など一つも残っていない。直に新たな患者がこのベッドを使うことになるだろう。おかしな人だつた。私は香坂さんの笑顔を思い出してふつと口元が緩んだ。あのおじいさんはやけに私の話を聞きたがった。私が今まで接してきた老人は大抵が話を聞くより自分が話す方が好きな人ばかりだつた。だがその人は私の話を一語一句漏らすまいとするかのように熱心に耳を傾けていた。あの人はきっと私のことを好いていた。うぬぼれでなくそう感じたのだ。だからこそあんなに私の話を熱心に聞いていたのだ。まるで全てを吸収し自分の中にするかのように。そういうばはじめは「わし」と言つていたのがいつの間にか「僕」になつていた。気持ちの上では若返つていたのかもしれない。もしかしたら私の話を真剣に聞くあまり私たちの立場を混同してしまつっていたのかもしれない。突然ベッドに倒れこんだ香坂さんを抱きかかえた腕の感触は今でも思い出せる。うつすら開いた目は天井を見ていた。あの時はまだ意識はあつたのだろうか？

「あ、それも忘れないようにな。」

「あ、はい。」

私はベッド横のネームプレートを取り上げもう一度だけ見る。『高坂文人』それをポケットに入れ、私は病室を後にした。なんとなくドライブに行きたい気分になった。

意識ホスピタル（前書き）

相手を愛していればこそ、自分の境遇よりも相手の事を想つもの
です。そして、その想いが伝わらないということは不安にも繋がつ
てしまいます。その不安を取り除きたくて、更にその相手を想うの
もまた愛情でしょう。

良く覚えていない。最初にそう思つたことだけはしっかりと覚えている。矛盾してる？ そうかも。でも、今私がこうしてこの場に立つていること自体、なんか矛盾してる気がする。何故だろう？ 何か、重要なことが抜けているような。考えすぎ？ そうかも。頭はまだ痛い。でも、大したことじやない。俊之に比べれば、こんなもの、子供だって泣かないくらいのかすり傷だ。透明の、それでいて何も見えないよう私の中に立ちはだかるガラスの向こう。俊之は、体中にぐるぐると包帯が巻かれ、体中にぐるぐるとチューブが通されている。ピクリとも動かない。本当に生きているのだろうか？ もしかしたら、そう見せてているだけなのかもしれない。誰が？ 真実を受け入れられない私の脳？ それとも・・私は後ろを振り返り、私と同様に悲しげな表情をした、白衣の医師を見た。

「ここは冷えるから。」

彼は、優しく私の肩にピンクのカーディガンを掛けてくれた。私のお気に入りの一品。去年の誕生日に俊之が買ってくれた一品。あのセンスのない俊之が良く、私の趣味に合うものをくれたなって、今になつてふと思う。あれ？ そうじやなくて私がおねだりしたんだつけ？ まあ今はどっちでもいいや。俊之が目を覚ましたら聞いてみよ。

「まだ、起きないようだね。」

白衣の医師、隆之は意識したのか、感情のない声でそう言つた。私は特に答えるでもなく、かといつて意思を隠すわけでもなく、ただその場に立ち尽くした。

「あなたは、そう遠くない時期に退院できるよ。」

「そう。」

「兄さんのことは僕に任せて。でも、できるだけお見舞いに来てあげてくれないかな。」

「つむくように、微かに頷いた。つもりだった。実際に首が動いたかどうか自分でも分からぬ。でも、動かした衝撃か、頭が一度ずきんと痛んだ。

私は病室のベッドで、見るとはなしに天井の蛍光灯を見ていた。眩しかつた。外は晴天で、きっと春の気持ちのいい風が吹いているに違いない。でもこの病室にはこれっぽっちも入ってこない。窓は開いていない。何故かカーテンも閉められている。一度目を閉じ、そして再び視界に蛍光灯を呼び込む。眩しい。真昼の蛍光灯がこれほど刺激的だとは思わなかつた。もしかして、少しばかりナイーブになつてゐるんぢやないかしら、私？今頃気付いたのかつて？そうかも。自分では、私はなかなか冷静で、物事を何でも客観的に見れる人間だと思つていたけど。状況が状況ぢやあね。

「気分はどう？」

隆之が病室にやつてきた。

「ちょっとばかり。」

隆之の顔にさつと不安の影が広がる。

「体調が悪い？」

「冗談よ。」

「気なんて違うなよ。本当のことを言つてくれ。」

あまりに真剣な顔なので、思わず吹き出してしまつた。

「本当に大丈夫よ。ごめんね、ちょっとからかつてみただけ。」

そう言つてもまだ納得してないのか、隆之は眉間にシワを寄せたまま私の顔をじっと見つめていた。

「本当に何ともないんだね？」

「ええ。ありがとう。」

そこでようやくほつとため息をついた。やつと納得してくれたら

しい。隆之つてそんなに疑り深い性格だつたかしら？それだけ心配してくれてるつてことかな。

「事故の後遺症は、僕の視点からはない。と言つて良いね。」

「僕の視点からは？」

「そう、外科医の視点として。心の方は、僕には分からない。」

私は首を傾げた。自分で言つのも何だけど、私はそこまでおつむが弱いとは思わない。だけど、あまり回りくどい言い方には慣れてない。俊之のようにもつと難しい本を読んだ方がいいかしら？

「たとえば、怖くて車に乗れないとか。」

「車に乗るどころか、この病院から出てもいないんですけど。分かるわけないわ。」

隆之はふふっと笑つた。

「まあそうだね。でも、想像くらい出来るだろ？そのときに恐怖とか感じたりしない？」

しばし考えた。想像する。俊之の運転する真っ白いセダン。私はゆっくりと、少しだけシートを倒す。気持ちよかつた。なんか懐かしい感じ。

「まあ、大丈夫かな。」

私の気持ちを見抜いたよつて、隆之はほつと息をついた。

「おかしいかな？」

「何故？」

「だって、俊之が、なんて言うか、あんな感じになっちゃうくらいの事故だつたわけでしょ？正直覚えてないんだけどさ。でも全然心に残つてないって、ちょっとどうかなつて自分自身思つちゃうよ。私つてそんなに鈍感だつたっけ？」

隆之は、私の肩にそつと手を置いた。まっすぐこちらを見つめる。「僕も詳しい事故の様子は聞いてない。何があつて、何の因果であるな大事故になつたかは分からぬ。でも、何があつたにせよ、自分が責めるような考えはしないように。分かったね、これは主治医

としての注意だよ。」

「大事故だったの？」

隆之が息を呑むのが分かった。しまった、と表情には出さないまでも、失言だったという意識は十一分に伝わった。

「確かに、ちょっとした事故じゃなかったことは、俊之の様子で分かるわ。」

「あまり、深く考えちゃだめだ。や、ゆっくり休むといい。」

ふつと、意識が飛ぶような感覚に襲われた。もう何度もだらう？ 事故から目覚めてから、よくこんな症状に襲われる。突然、意識をシャットダウンされるかのような錯覚。誰に？ 現実を受け入れられない私？ それとも・・・。

2

僅かに開いているカーテンの隙間から朝日が差し込む。小鳥がさえずる。俺はその声で目を覚ます。小鳥の声が目覚まし代わりなんて、随分と優雅に感じるだろう。俺だって昔はそう思っていた。そう、昔は、だ。実際その立場になつてみて分かる。やつら、結構うるさいぞ。まだまだ身にしみる4月の寒い朝。もちろん窓は閉めてる。鍵だつて閉めてるから、隙間が開いてるなんてことはない。なのに、やつらの声はうるさい。俺はうんざりとした表情を作る、もちろん誰も見てくれる者はいないけど。元凶の小鳥に見せてやつたところで理解してくれるはずもないし。まあとにかく、うんざりだと自分自身に改めて認識させるが」とく、俺は今日も顔をしかめる。そしてようやく、ベッドから体を起こすのだ。体がだるい。少しばかり頭痛もする。ちらと、ベッド脇のガラス張りの小さな丸テーブルに置かれた時計を見た。今の時間と共に、今日の日付と曜日が示されている。そうか、今日は休日だ。それで、昨日は羽目を外して

夜遅くまで同僚と飲んでしまったのだ。頭痛と氣だるさはこのためか。つまり、早い話が二日酔いだ。どうしよう? 今日はこれといて予定はない。まあ、いつも通りだが。もう一度寝るか。倒れこむように布団に潜り込み、そして結局は、いまだ大合唱を止めない小鳥たちの声により、無理やり夢の世界から引きずり出されるのであつた。のそのそと起き上がり、ふと気付いた。俺が今着ているのは、随分変わった寝巻き。いやいや、スーツだ。どうやら俺は昨日相当酔つていたらしい。自分自身、これはやばいだろつてくらいに醉つたときでも、大概是ちゃんとシャワーを浴びて床に就く。さすがに着替えないで寝てしまうなんてことはなかつた。初めての経験だ。なんとなく大人になつた気分。堕落した大人。もちろん褒められたことではないわな。しかし、起きてみると意外や意外、二日酔いはさほどきつではない。俺もまだまだ若いということだろうか。気がつくと、俺の腹は食料をくれとせがんでいた。よしよし、今やるからおとなしく待つてなさい。

昼過ぎになると、二日酔いはすっかり良くなつていた。元々軽かつたのだからそれでも長引いた方かな? 二日酔いなど数えるほどしか体験したことのない俺としては、こんなものかな、と、すんなり受け入れることが出来た。さて、昼食はどうしよう? 朝は適当に済ませたが、体調も回復した今となつては、何かガツンと食べて体調の最終調整をしたいところだ。冷蔵庫を開けた。一人用の小さなやつだ。大した量は入らない。と言うか、たくさん入ろうが入るまいが、俺の冷蔵庫は大抵スカスカだ。今日だつて案の定、牛乳とマーガリンしか入つてなかつた。これで何をガツンと食べると? 小麦粉はある。ホワイトソースでも作つてみる? 作つたところで何にかけよう? 食パンは朝食べきつた。出るしかないな、外。こんなとき彼女でもいればなあ。俺は、2週間前に別れた幸枝の顔を思い浮かべた。彼女は料理が得意ではなかつた。でも俺と一緒に作るのは好きだと言つていた。俺も、一緒にやるのならと、彼女といろいろ作つ

た。ホワイトソースはそのお陰で作れるようになつたのだ。とはい
え、大して美味しいものを作れた記憶はない。

「味より、一緒に作つたつて事実のが大事だと思わない？」

「彼女はよくそう笑つた。

「精神論としてはいいコメントかもしれないね。でも、不味いもの
は不味いよ。」

別れる前日も、このようにいつもと同じ会話がなされていった。そ
う、いつも通りに。なのに何故、その翌日に彼女は去つていったの
か。俺は今でも分からぬ。彼女の去り際の言葉は・・何だっけ?
忘れてしまつた。まあいいか。忘れたつてことはきっと、彼女のこ
とを忘れようと俺の脳が削除作業に勤しんでいるのだ。きっと今に、
彼女のことを綺麗さっぱり忘れられるさ。そんな言い訳を自分にし
つつ、結局は彼女のことを必死に脳に留めようととしているのだろう。
男つて悲しい動物だなあ。そんなことをしたつて腹はいっぱいにな
らないのにな。ぐう、と情けない声で返事をする俺の胃。俺はいそ
いそと準備を済ませ、昼食に出かけたこととした。

俺の住むアパートから、さほど歩かないうちに中心街に出られる。
通行人の、そして車の通りが多い。そうか、今日は休みだもんな。
改めて思い出し、この記憶力の薄さはなんだと自分でおかしくなつ
た。さて何を食べようかな。通りにはいくつもの食事処が軒を連ね
ている。古い大衆食堂や真新しいレストラン、全国チェーンのファ
ミレス。どれも、いまいち入る気がしない。腹は減つている。だが、
どうも食欲がわかぬようだ。おかしいな、部屋を出るときは何か
食べたいと思ったのに。一日酔いつて後から来るんだなあ。とりあ
えずコーヒーでも飲むか。俺は喫茶店を探した。だが、いくら捜し
ても見当たらない。この付近はどうやら喫茶店やカフフの類がない
ようだ。まあ二つの違いは分からぬが。ちえつ。そう舌打ちした
瞬間だつた。爆音。いや、言いすぎた。でも何かが激しくぶつかつ
たような音だ。その方向を見た。数台の車があらぬ方向を向いて止

まっている。その顔はどれも、試合後のボクサーのようにぼこぼこだ。煙が上がっている。交通事故か、えらく激しいな。その時だつた。頭がずきんと痛んだ。やはり一日酔いは、そう簡単に俺を解放してくれていなかつたようだ。そして、その痛みのお陰か、俺は一つ思い出した。二日酔いが予想に反し軽かつたのは、俺の体が若かつたからではなく、一緒に飲んだ同僚とノリで試してみたウコンが効いたらしいからだつた。忘れてた。思えばいやはや嬉しい誤算だつた。吉田はどうかな？あいつもすつきり目覚めたかな？同僚の一人を思い出し、そして俺は違和感を感じた。あれ？昨日は吉田はいなかつたっけ？いや、つて言つた誰と飲んだんだっけ？思い出せない。ただの一人も。実は俺一人で飲んでとか言うオチかいや、一人で飲むことなんてない。ましてや一日酔いになるほどまで。思い出せなくなるほどべろんべろんに酔つてしまつたということだろうか？まったく、そんなに昔の記憶つてわけでもないはずなのに。事故の方に目を戻す。事故の当事者らしき人々、野次馬やらが群がつてゐる。遠いせいか、彼らの言葉は僕の耳まで届かない。その代わり、街中なのに、何故か小鳥の声が響いてきた。空を見ると、電線に名も知らぬ種類の鳥の群れが羽を休めていた。雑踏の中でも聞こえてくるのか。今まで気付かなかつた。ちょっと頭が痛いくらいだ。どうやら俺の考えていた以上に、やつらの声はうるさい。

3

病院の廊下は思つた以上に寒い。私は両足で床の冷たさを感じた。冷たすぎて痛いくらいだ。もしかしたら事故の影響もあるのかもしない。

「寒くない？」

声の主は振り向かなくても分かる。私はこくりと頷いた。俊之のくれたカーディガンが、私を芯まで冷やそうとする廊下の魔の手から守ってくれている。私は今日も、俊之のいる集中治療室の前まで

やつてきた。

「中には入れないの？」

「うん、まだ容態が安定するまでは。」

私の頭に、隆之の申し訳なさそうな顔が浮かぶ。私は、振り返つて微笑んだ。

「ゆっくり寝てるんだし、起こすのは悪いよね。」

隆之は、私の予想通りの表情をしていたが、私の視線に気付きさつと笑顔を取り繕つた。隆之ってこんな顔見せたつけ？どちらかといふとあまり感情を表に出さない人間だと思ってたんだけど。まあ状況が状況だしね。自分の実のお兄さんが意識不明の重体つて時に無表情で冷静に、つてわけにはいかないよね。私は俊之の方へと向き直つた。

「どんな夢見てんのかな？」

私の夢かしら？なんてね。私はふつと鼻で笑つた。なんてね？ちよつと待つて、なんで自分で否定してるのかしら？彼女なんだから彼氏が自分の夢を見てるかな、なんて思つるのは普通よね？

「きっと、いい夢だよ。」

隆之が言つた。私は、何も言い返さず一步だけ俊之の方へと足を踏み出した。スリッパの、パタンッといつ音だけがやけに大きく響いたように感じた。

「ここは、静かね。静か過ぎるくらい。」

「そう？ 望んでるからだろ。」「

私はふと違和感を感じた。隆之の返事。おかしな返しだ。

「望んでるつて、誰が？」

「・・あ、ごめん。なんて言つた・違うこと考えてた。ここは、まあほら、静かにしなきやいけないとこらだしね。」

俊之の寝ている集中治療室を正面に見て、右手はすぐに左へと曲がつていて、左手は比較的長いまつすぐの廊下が続いている。私と隆之以外、この通路に今人は見えない。

「この区画は、人がいなければいほどいいと言える所だ。重体

の患者さんがいなつてことだからね。」

「俊之みたいな？」

少しだけ、間が空いた。意地悪な言い方だつてことは自分でも認識してる。俊之は私にとつても大事な人だけど、隆之にだつてそうだものね。

「・・・そう、兄さんみたいな、ね。」

足音が近づいた。まっすぐ前を見ている私の視界の右端に、隆之の横顔が映りこむ。

「気持ちよさそうに寝てるだろ。昔から、兄さんの寝顔は本当に気持ちよさそうだった。」

もちろん知らないわけではない。でも、さすがに本人の弟に対しても、そうよね、私もいつも思つてゐる、なんてことは口には出来ない。それくらいの配慮はできる女よ。当たり前？ そう言われれば、そうかも。

「ところで、こんなところでいつまでも油売つていいの？ あなたはあなたで大変でしょ？」

隆之は少しだけ思案するように目を泳がせ、笑顔を見せた。

「まあ、僕はまだまだ一人前の医者とまではいかないし。担当も少ないんだ。病院 자체これだけ大きいからね。医者はたくさんいるよ。」

「だから、自分ひとりがここでサボつてたつて問題ないって？」
そう言つて、私も口元を緩めた。そして、

あれ？ 今私、何かしようとしてなかつたつけると、声には出さず、問いただした。もちろん、私が答えられるはずもなく。辿り着く答えは一つ。

「まだだ。」

私の口は、意識することなく自然に呟いていた。まだ。また、意識が飛んだのだ。今まで、なんとなくその瞬間が感じられた。でも今のは、全く分からなかつた。意識が飛んだ後になつて気付い

た。こんなことは初めてだ。後ろを振り向いた。さっきまで横にいたはずの隆之はいつの間にか私の背後に立っていた。先ほどと同じような笑顔だ。でもその笑顔は、心なしか無理をしているようにも見えた。

「まだ帰らなくてもいい？」

隆之は優しい声でそう言った。

「・・・ええ。私は暇な身だし。」

隆之の微笑んだ顔。こんなに綺麗な顔してたつけ。いや、別に汚かつたようなイメージがあるわけではないのよ、決して。ただなんて言ひつか、昔より近づきやすくなつたつていうか、正直心に深くとどまるようになつたつていうか。不謹慎？ そうかも。これは、不謹慎な気持ちかもしれない。私は、もしかしたら、隆之が。

「どうかした？」

「え？」

どうやらひとつ沈黙があつたらしい。周りが分からなくなるくらい考え込んでしまるのは私の癖だった。でも今、心配になるほど長い間黙つてたかしら？

「やつぱりもう部屋に帰ろう。怪我は大したことないけど、もう少し療養が必要だ。」

隆之の、通路を歩く音が響く。しばらくとどまつて、私も隆之後を追つて歩き出した。一人の足音がやけに大きく聞こえる。それこそ耳障りなくらい。私は、皮肉をこめて言った。

「やつぱりここは、静かね。静か過ぎるくらい。」

私の皮肉を笑つてくれただろうか。前を行く隆之の表情はつかがい知れなかつた。たぶん、もうすぐまた意識が飛ぶ。

幸枝との別れから、3週間が経とうとしていた。俺は、依然一人で、まともな食事も取らずに、ただただ会社とアパートを往復する生活を繰り返していた。別に別れた彼女のことを引きずつているわけではない。どうも体調が思わしくないのだ。食欲もない。先週の休日以来だ。確か、交通事故を見た。その後からだつたか、食欲が湧かなくなつたのは。もしかして、その事故で誰かが死んで、俺にとり憑いたんじゃなかろうか。偶然通りかかっただけだつてのに、まったく、恨む相手を間違えてるぞ。なんて愚痴つているまさにその時だつた。けたたましく鳴り出す携帯電話。体が跳ねるほどに驚いてしまつた。恥ずかしい。いつの間にか音量設定を間違つていじつていたらしい。鞄から取り出してディスプレイを見る。同僚の川崎だ。同期入社で部署も一緒なので、仲のいい同僚の一人だ。

「なにかあ？」

「何だよ、そのやる気のない声は。」

川崎の声は大きく、高い。体調不良の体にはいきさか応える。

「たつた今やつとこさ帰り着いたところだ。今更残業しになんか戻らないぞ。」

「違う違う。そんな憂鬱な話しじゃねえよ。」

川崎の声はいつもよりうきうきしているように感じられた。といふことは、

「合コン。」

「正解。さすが同期、話が分かるねえ。」

俺は携帯電話をちょっとだけ顔から離してため息をついた。

「毎週毎週よくやるなあ。」

「その合コンのお陰で彼女と知り合つたんだろ。あ、ごめん。元彼女な。」

こいつ。知つててわざと言いやがつたな。

「今週末。場所はいつもの処だから。」

「行くとは言ってないつもりだが。」

「どうせ用事なんてないんだろ？ 独り身でさ。あ、ごめん。」

「ここまで容赦なく人の傷口をいじくる奴はそつそついないだろうな。

「最近体調悪いんだ。その日調子よければ、でいいか？」

「じゃあ今週末な。時間は後日報告する。」

今の返事は、有無を言わせないってことか？俺が何を言つ隙もなく電話は切れた。つたく、勝手な奴だ。俺は携帯を放った。それはテーブルの中央付近で音を立て、しかし止まるところを知らず崖から落ちる車よろしく真っ逆さまに床へ。ずきんと一つ、まるで何かを忠告するかのように頭が痛んだ。落ちた携帯を車に例えたことに腹を立てたのだろうか？誰がって？そりゃあここ最近俺の不調の原因を作つている奴だろう。やっぱり俺はある交通事故の当事者にとり憑かれているんだ。テーブルの端に無造作に置いてある頭痛薬を一包だけ手に取りキッチンへ向かった。ガラスのコップに水道水をこれでもかと注ぎ、頭痛薬の口を破つた。漢方薬独特の鼻につく匂い。この匂いを嗅ぐと余計に頭痛が悪化しそうだ。俺は意を決してその中身を一気に口の中へ。間髪開けず水で流し込む。それでも

「おえっ。」

目が回りそう。なんという苦さだ。毎回こんなことを繰り返しながら、今日も一日が終わる。週末までに治りそうもない。川崎には明日にでもそう云えよ。俺は、口の中に薬の後味を感じながら、シャワーで汗を流し、倒れるようベッドへ。そして夢の中へ。

「さていよいよ今夜ですな。お前にもいじ出合いがあるといいな。」

川崎は朝から上機嫌だった。そして、それに反比例するよつに俺は不機嫌だ。

「だから、俺は行かないって言つただろ。」

「いつ？」

「一昨日だよ。」

「今日も体調が悪かつたら、だろ？」

「悪いよ。今朝も薬飲んで来たんだ。」

「薬飲んできたのか」

そこでようやく、川崎は心配そうな表情を浮かべてくれた。しかし、

「じゃあもう大丈夫だな。全く、用意周到だなあ。」

「こいつ、一発ぶん殴つてやるつか。」

「立つてられないほど辛いのかよ？」

「いや、そこまではないけど。」

「じゃあいいだろ。もう数に入ってるし。心配すんなよ、ホント危なそうだつたらちゃんと家まで送つてやるし」

川崎は、男に對してはあまり優しいところを見せない。だから、たまにこんな優しい面を見るといつも、騙されるわけだ。俺はといえば、自分で言うのもなんだが多分他の人以上に、騙されやすい。結論から言おう。行きましたよ、合コン。

定時と同時に動き出す4人組。部署は違えど皆同期入社だ。俺を除いた3人、川崎、高峰、吉田はうきつき気分を隠しきれないらしい。他愛ない話をしている割にはえらく笑い声が大きい。俺はふと、先週末のことを思い出した。

「なあ吉田。」

「ん? 何?」

「先週末、一緒に飲んだっけ?」

「先週末に高木と? えっと・・・」

吉田の答えも的を得ない。相変わらず頼りない奴だ。

「はい、着きましたよっと。」

もう?俺は一瞬耳を疑つた。そして周りを見渡す。俺たちが勤めている会社から、川崎が合コンでよく使うといつこの居酒屋までは歩いて30分近くかかる。

「なんか、すごく早く着いたように感じたんだけど。」

その言葉を聞いた川崎は笑つた。

「なんだかんだでお前も楽しみなんだろ。気が気じゃないから時間

が分かんなくなるんだよ。」

そうなのか？それにしては不自然な気が。俺はここまで道のりを思い出した。・・驚いた、思い出せる。ちやんと思い出せる。もちろん、会話の一語一句全て、とうわけではないが4人で歩いてここまで来た。意識が飛んだわけでもないし瞬間移動だつてしない。つまり、川崎の言うとおり俺は今日の合コンを楽しみにしていたつてことか。

「薬の飲みすぎで意識朦朧なんじゃねえの？」

高峰が笑う。ここつの話す言葉は品がない。正直言つてあまり好きなタイプじゃなかつた。適当に流す。

「まあとりあえず入るわぜ。川崎、相手側はまだなんだろ？」

「もち。俺らより30分遅く来るよう設定してるから。」

その間に会場のセッティングや今後の計画の話し合いをするらしい。仕事もそれくらい気を利かしてやってくれればなあ、俺はぽんやりとそんなことを考えた。

店に入るなり、頭痛がした。いつものように、ずきんと一度のみ。もう慣れてきた。4畳ほどの個室に通される。テーブルを挟んで2列に並んで座る形だ。とりあえず最初は、とこうことで俺たちは片側に並んで座つた。とくにすることもなく、俺は部屋を見渡した。

「本日のおすすめ」と手書きで書かれた張り紙。その他にもいくつかメニューが書かれた張り紙が並ぶ。上座には良さげな掛け軸が掛かっていたが、煙草のせいいか少し黄ばんで見える。

「あ、メール来了。もうすぐ着くつてよ。」

川崎の言葉に、その他3人の間に緊張が走る。そう、俺もその一人だ。ちやつかりその気じゃないかつて？そりやあ、ここまで來たんだ。楽しまなきや損だろ？個室の外から、3、4人の女性の話し声が聞こえてきた。あの娘たちかな？ずきん。話し声がだんだん近づく。ずきんずきん。ちょっとおかしいぞ、いつもと違う。

「あ、こっちは。」

川崎が顔を覗かせて手招きしている。依然、俺の頭は何かを訴えか

けるように痛み続けていた。これは、やばいんじゃないか？

「どうもー、今日はよろしくお願ひしまーす。」

その声がやけに色褪せて聞こえた。まるで遠い昔に聞いた声。ず
れん。ここに来たことに腹を立てたのだろうか。誰がつて？そりや
あここ最近俺の不調の原因を作っている奴だろう。やっぱり俺はあ
の交通事故の当事者にとり憑かれているんだ。俺は少しでも落ち着
こうとイメージした。倒れこむようにベッドへ。そして夢の中へ。
その瞬間、相沢由紀と田が合つた。そういうことか。世界が崩壊す
る・・

5

ベッドの中で、私は考えていた。さつき、集中治療室前の廊下で、
私は裸足だった。床の冷たい感触を思い出せる。でも、隆之と並んで
部屋に帰ったときはちゃんとスリッパを履いていた。その一時だけ
脱いだだけじゃないかって？ そうかも。でも私はこの部屋からス
リッパを履いて行つたのか、はじめから履かずに行つたのか覚えて
いない。というより、自分で歩いてそこまで行つた記憶すらない。
俊之のところに行こうと思つたらいつの間にかそこにいた、そんな
気がする。意識が飛ぶのだ。事故の後遺症だろうか。

「体調はどう？」

「今すぐにも退院できるくらい元気よ。」

カンペを読むみたいに、棒読みで答えた。どう考へても元気な人
間の話し方じやない。でも隆之の答えは違つた。

「そう、それはよかつた。」

そう言つて笑顔を作る。その顔はどこかぎこちない。台詞とは違
い、隆之の表情は私の心情を映し出す鏡のよつだ。

「俊之は元気？」

「え？」

隆之は、それだけ言つて、凍りついたように何も言わなくなつた。やはり何かおかしい気がする。单なる氣のせいじゃないかつて？そういうではないかも。

「笑えないジョークね。『めんなさい。』

私が言つと、ようやく隆之の口が解凍された。

「あ、ああなんだ。びっくりしたよ。突然何を言い出すのかと思つたら。」

「突然ついでに、今から俊之のところに連れて行つてくれない？」

私は、何とはなしにベッドの側面のネームプレートに目をやる。

「・・ああ、もちろんいいよ。」

『相沢由紀』の文字が、ひどく歪んで見えた。これは、氣のせい？ そうかも。

いつもの場所、いつもの配置。私と隆之と、ガラスの壁を隔てて俊之。

「ねえ、隆之。」

出来る限り明るい、いつもの声で語りかけた。

「何？」

振り返る隆之の顔は、やはりどこか不安げな表情。

「私は、まだ退院できなんじよ？」

「何でそう思うの？」

「私たちはどうやってここまで来たの？歩いて？私の病棟は何階？」
「ことは違つ階？だとしたらどう来たの？階段を使って？それともエレベーターを使った？」

隆之は何も言わない。じつと私を見つめている。

「記憶が飛ぶの。何となく、ここまでどうやって来たか分からぬもない。でもそれは、昔の記憶のような、ひどく曖昧なもの。」「そうなの？」

隆之は、搾り出すような声でそれだけ言った。私は思つ。この声

は、本当に隆之が発したものなのだろうか？私が、そう言ったように勝手に認識しているだけじゃなくて？気のせいじゃないかつて？

「どうかしら？」

「後遺症のかしら？それとも、何か別の・・・」

思わず電気信号を一旦遮断した。強制終了のような。危ないか？

「記憶が飛ぶ？つまり、時間が飛んだという認識があるってことか？」

知らず知らず僕は呟いていた。目を、デスクのパソコンから、ガラスで仕切られた向こうの部屋へと向けた。二つのベッド。二人の男女。一人とも、体中に管やコードが絡みついている。高木俊之と相沢由紀は、共に意識不明の重体でこの病院に運ばれた。回復の望みは薄い。

「高木先生。コーヒーをどうぞ。」

「ああ、ありがとうございます。」

「どうですか？何か進展が？」

「まあ、パソコンで打ち込んだ言葉を電気信号で送れば、反応を返す。会話くらいはできるようになつたよ。」

「「」の「」一人は恋人同士ですよね？高木先生なら、お一人の意識、意思回路を繋げて対話も可能に出来るんじゃないですか？」

「」の助手は、高木俊之と僕が、兄弟であることを知らない。そして、相沢由紀が俺の高校時代の同級生だということも

「男性の方は、呼びかけても反応がない。まだ夢の中にいるようだ。」

「そうですか。こんなに近くにいるのに、何だか可哀想ですね。」

そう言って、一礼の後助手は部屋を後にした。こんなに近くにいるのに、か。僕はもう何年もそんな状態だったんだ。ガラスのすぐ手前まで言って、僕はそつと呟いた。

「由紀。」

好きだ、その言葉は口には出さなかつた。一人は、この先、延命措置を続ける限りずっとこのままだらう。僕は思う。例え、兄さんとの電気信号による対話が可能になつても、僕は由紀と兄さんの回路を繋ぐことはないだらう。僕は非道い男だらうか？でも、ここで一番辛いのは、誰だ？そのことを考えれば、僕の気持ちもちよつとは分かつてくれると思う。

多分僕は、二人の回復を、望んでは、いない。

僕は、非道い男だらうか？兄さんも、由紀も、その問いには答えてはくれなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8776/>

彼と彼女の恋愛事情

2010年10月15日22時09分発行